杉谷４号墳

－ 第５次発掘調査報告書 －

２０１７年１２月

富山大学人文学部考古学研究室

杉谷４号墳

－第５次発掘調査報告書－

二〇一七年十二月

富山大学人文学部考古学研究室

杉谷４号墳

－ 第５次発掘調査報告書 －

２０１７年１２月

富山大学人文学部考古学研究室

杉谷４号墳

－ 第５次発掘調査報告書 －

２０１７年１２月

富山大学人文学部考古学研究室

例　言

1．本書は、富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）が、平成28（2016）年度に実施した、富山県富山市杉谷2630（富山大学杉谷キャンパス内）に所在する杉谷４号墳における第５次発掘調査の成果報告である。

2．杉谷古墳群内の古墳名称は、遺跡台帳の登録では杉谷４号古墳となっているが、本書では杉谷４号墳とする。なお、１番塚古墳と２番塚古墳、３番塚古墳については、このままとする。

3．発掘調査は、富山市教育委員会の協力を得て、富山大学人文学部考古学研究室の構成員が中心となり実施した。

4．本書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（1998年版）である。

5．本書で用いた座標は、国土座標第Ⅶ系（世界測地系）に基づくものであり、南北をＸ軸、東西をＹ軸として示した。方位は真北、水平基準は海抜である。

6．本文の執筆、出土遺物の実測、製図、写真図版作成は、次山 淳（富山大学人文学部教授）、高橋浩二（富山大学人文学部准教授）、蒲生侑佳、佐藤巧庸、清水秀直、泉田侑希、二口頌之、（以上、富山大学人文学部学生）が担当して行った。分担は目次及び各項目の末尾に記すとおりである。

7．「杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡」については、すでにまとめたことがあるので本書では省略した。また、「研究史」についてもすでにまとめたことがある。詳しくは、富山大学人文学部考古学研究室2014『杉谷４号墳－第１次発掘調査報告書－』または2015『杉谷４号墳－第２次発掘調査報告書－』を参照されたい。

8．写真撮影は、第１調査区については次山、調査区設定状況及び完掘状況と第２調査区については高橋が担当して行った。

9．出土遺物、調査図面及び写真等は、富山大学人文学部考古学研究室で保管している。

10．現地調査にあたっては、安念幹倫氏、鈴木景二氏、高梨清志氏、高橋克壽氏、友廣哲也氏、藤田富士夫氏、古川登氏、三好清超氏、村田裕介氏、富山市教育委員会の方々からご教示ならびにご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

11．本書の編集は、高橋が担当して行った。

12．本書は、平成28～29年度富山大学人文学部傾斜配分経費（フィールドワーク・実験系教育支援経費）の活動成果を含むものである。

杉谷4号墳　第5次発掘調査報告書

目　次

例　言

第1章　調査経過

1　調査に至る経緯……次山 淳…… 1

2　調査経過と調査組織 ……蒲生侑佳・高橋浩二…… 2

第2章　既往の調査と第5次調査の目的……高橋浩二…… 6

1　富山市教育委員会による調査の成果 ……清水秀直…… 6

2　富山大学人文学部考古学研究室による第4次調査の成果 ……泉田侑希…… 9

(1) 第1調査区 ……泉田侑希…… 9

(2) 第2調査区 ……泉田侑希…… 10

3　調査の課題と目的 ……高橋浩二…… 13

第3章　発掘調査の成果

1　測量基準点……次山 淳・蒲生侑佳…… 15

2　調査成果

(1) 調査の目的と調査地区の設定……次山 淳…… 15

(2) 過去の調査（第1調査区側）……蒲生侑佳・清水秀直・二口頌之…… 19

(3) 第1調査区の調査成果 ……蒲生侑佳・清水秀直・二口頌之…… 19

(4) 墳頂部の土層 ……蒲生侑佳・清水秀直・二口頌之…… 25

(5) 遺物の出土状況 ……蒲生侑佳・清水秀直・二口頌之…… 32

(6) 過去の調査（第2調査区側）……佐藤巧庸・泉田侑希…… 32

(7) 第2調査区の調査成果 ……佐藤巧庸・泉田侑希・高橋浩二…… 33

(8) 墳頂部の土層 ……佐藤巧庸・泉田侑希・高橋浩二…… 43

(9) 遺物の出土状況 ……佐藤巧庸・泉田侑希・高橋浩二…… 44

第4章　出土遺物…… 蒲生侑佳・佐藤巧庸・清水秀直・泉田侑希・二口頌之・高橋浩二…… 48

第5章　考　察

1　墳頂部の築成法について……次山 淳…… 52

2　標示石について……次山 淳…… 52

第6章　まとめ ……次山 淳・高橋浩二…… 54

図　版

抄　録

図 版 目 次

写真図版１	1	第４次調査第１調査区との位置関係（E点・第１−１調査区側、東から）
	2	第４次調査第２調査区との位置関係（N点・第１−２調査区側、南南東から）
	3	調査区設定状況（E点・第１−１調査区側、東北東から）
	4	同上（N点・第１−２調査区側、北から）
	5	同上（S点・第２−１調査区側、南から）
	6	同上（W点・第２−２調査区側、西南西から）
写真図版２	7	調査区完掘状況（E点・第１−１調査区側、東から）
	8	同上（N点・第１−２調査区側、北から）
写真図版３	9	第１−１調査区サブトレンチ③盛土状況・富山市旧トレンチ確認状況（南東から）
	10	第１−１調査区サブトレンチ①盛土状況（左側は第４次調査第１調査区、東から）
	11	第１−１調査区サブトレンチ⑤土手状盛土検出状況（東から）
	12	第１−２調査区サブトレンチ②盛土状況（北から）
	13	第１−２調査区K−d壁側盛土状況（北西から）
	14	第１−２調査区ゴミ穴検出状況（北から）
写真図版４	15	調査区完掘状況（W点・第２−２調査区側、西から）
	16	同上（W点・第２−２調査区側、西から）
写真図版５	17	第２−１調査区完掘状況（S点側、南から）
	18	第２−１調査区落ち込み検出状況（西から）
	19	第２−１調査区富山市旧トレンチ確認状況（a−a′壁側、北西から）
	20	第２−１調査区s−c′壁側盛土状況（南から）
	21	第２調査区富山市旧トレンチ確認状況（南西から）
	22	第２−２調査区富山市旧トレンチ底面確認状況（西から）
写真図版６	23	第２−２調査区礫1〜3検出状況（南西から）
	24	第２−２調査区礫１及び台付壺検出状況（北東から）
	25	第２−２調査区d′−W壁側盛土状況（南東から）
	26	第２−２調査区第10層土器検出状況（d′−W壁、東北東から）
	27	第２−２調査区西側盛土状況（北東から）
	28	第２−２調査区土手状盛土断ち割り状況（北から）
写真図版７	29	出土遺物

挿図目次

第 1 図　第 5 次発掘調査参加者 …… 4
第 2 図　杉谷 4 号墳測量図及びトレンチ配置図（富山市教育委員会1974掲載図の縮尺を1/500に改変）［清水秀直 作成］ …… 7
第 3 図　杉谷 4 号墳出土土器（富山市教育委員会1974） …… 8
第 4 図　第 4 次調査第 1 調査区・第 2 調査区断面図（富山大学人文学部2016を改変）［泉田侑希 作成］ …… 11〜12
第 5 図　調査区基準杭配置図［蒲生侑佳 作成］ …… 16
第 6 図　調査区配置図及び富山市旧墳頂トレンチ配置図［二口頌之 作成］ …… 17〜18
第 7 図　第 1－1 調査区平面図・断面図［蒲生侑佳・清水秀直・二口頌之 作成］ …… 21
第 8 図　第 1－2 調査区平面図・断面図［蒲生侑佳・清水秀直・二口頌之 作成］ …… 23
第 9 図　第 1 調査区平面図・断面図［蒲生侑佳・清水秀直・二口頌之 作成］ …… 26
第 10 図　第 4 次調査第 2 調査区断面と K－a 断面と w－c 断面の合成図［蒲生侑佳・清水秀直・泉田侑希 作成］ …… 29〜30
第 11 図　第 2－1 調査区平面図・断面図［佐藤巧庸 作成］ …… 35
第 12 図　第 2－2 調査区平面図・断面図［佐藤巧庸・泉田侑希 作成］ …… 41
第 13 図　第 2 調査区遺物分布図［佐藤巧庸・泉田侑希 作成］ …… 45
第 14 図　土器出土状況［佐藤巧庸 作成］ …… 46
第 15 図　土器出土状況［泉田侑希 作成］ …… 46
第 16 図　出土遺物［蒲生侑佳・佐藤巧庸・清水秀直・泉田侑希・二口頌之 作成］ …… 49

表目次

第 1 表　第 5 次発掘調査の作業経過［蒲生侑佳 作成］ …… 5
第 2 表　調査区基準杭一覧［山場愛弓 作成］ …… 16

第１章　調査経過

1．調査に至る経緯

標高 60～70mの杉谷丘陵は、富山平野を東西に二分する呉羽山丘陵の南西端に位置する。杉谷古墳群は、この丘陵上の三つの平坦面のうち南東部平坦面の南の縁辺にそって築造された 11 基の墳墓からなる古墳群である。

この古墳群の内容が明らかになったのは、1974（昭和 49）年に富山市教育委員会が実施した確認調査の成果による[1]。1 番塚古墳、2 番塚古墳、3 番塚古墳、4 号古墳、5 号古墳、6 号古墳、7 号古墳についてトレンチ調査がおこなわれ、墳形等の確認がなされた。とりわけ 4 号墳については、その墳形が山陰地方に特徴的な弥生墓制である「四隅突出型」とされたことから全国的な注目を集めた。

その後、杉谷丘陵には国立富山医科薬科大学の新設計画が進められたが、古墳群そのものは学術的な価値からも建設予定地から除外されるとともに、県有地として保存されることとなった[2]。2004（平成 16）年の国立大学法人法施行を受けて、富山県内に所在する 3 国立大学（富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学）が統合され、翌年 10 月に新富山大学（富山医科薬科大学は医学部・薬学部、高岡短期大学は芸術文化学部）が発足した。この統合にともない、県有地であった古墳群の土地は大学に移管され、富山大学による所有・管理のもとで現在に至っている。

富山大学では、杉谷古墳群がキャンパス内に所在する貴重な歴史的遺産であるという認識から、学術研究の対象とすること、遺跡そのものを広く公開すること、地元の方々が取り組んだ杉谷古墳群顕彰事業[3]の熱意を受け継ぐこと、さらに古墳群の内容を明らかにするための新たな発掘調査の必要性などの観点から、現状の維持・管理ならびに文化財としての保存・活用についての検討が行われた。

一方、人文学部考古学研究室では、以前から富山県を中心とした「北陸地方における古墳出現過程の研究」を研究テーマのひとつとして取り組んできたことから、弥生時代墳墓との関連性を色濃くとどめる杉谷古墳群は、研究・教育の両面において好適なフィールドと考えられた。そこで、平成 21 年度に 3 カ年にわたる杉谷古墳群の発掘調査を計画し、関係機関との調整をおこなった。幸いにも地元の方々ならびに関係各位の理解と協力を得られるところとなり、調査の実施にいたることとなった[4]。

第 1 年次（平成 22 年度）・第 2 年次（平成 23 年度）は、杉谷 6 号墳を対象に測量調査およびトレンチによる墳丘の発掘調査を実施し[5]、第 3 年次（平成 24 年度）は調査対象を 4 号墳に移し、東側突出部の発掘調査（第 1 次）を実施した[6]。

3 カ年の調査終了を受けて、平成 25 年度には杉谷古墳群に対する調査継続の方針を確認し、あらたに 7 カ年の調査計画を策定した。計画は本学役員会において了承され、第 1 年次（平成 25 年度）は、南側突出部の実態の解明を目的に第 2 次調査を実施した[7]。以降、第 3 次調査を南側突出部に対する補足調査ならびに西側突出部の解明を目的に実施[8]、第 4 次調査は墳丘斜面の実態の解明を目的に東側墳丘隅方向および墳丘北東辺中央部を対象に実施した[9]。

第4年次にあたる平成28年度は調査計画にもとづき墳頂部平坦面を調査の対象とすることとし、平成28（2016）年6月9日付けで、文化財保護法第92条第1項の規定にもとづく埋蔵文化財発掘調査届を富山市埋蔵文化財センター経由で富山県教育委員会に提出し、同年8月1日より調査を開始した。調査の終了は8月31日である。

現地での調査にあたっては、富山大学人文学部ならびに杉谷キャンパスの教職員の方々にさまざまなかたちでご援助をいただいた。上記の各位、地元の方々、関係各機関に対し併せてここに感謝の意を表する。なお本調査は、平成28年度人文学部傾斜配分経費（フィールドワーク・実験系教育支援経費）の配分を受け実施したものである。　（次山　淳）

2．調査経過と調査組織

第5次調査では、杉谷4号墳墳頂部で調査を実施した。調査区は、1974年に富山市教育委員会が行った発掘調査トレンチ位置の確認と、その報告書において「土壙ともみれる」と記載された260㎝×130㎝の他と比べてやや黒ずんだ長楕円形の範囲の検出、また富山大学第4次調査で墓壙の可能性が推定された土層（第4次調査第1調査区第13層）の広がりを確認することを主な目的として、既往のトレンチが調査区内にうまく重なるように設定した。加えて、墳頂部における盛土の状況等を確認する目的で、調査区中央に幅0.5mの畔を十字に設定した。調査期間は、2016年8月1日～8月31日である。調査経過は次の通りである。

初日の8月1日は、コンテナハウスを設置、ローリングタワーと発掘機材の搬入を行った。その後、墳頂部を清掃し、発掘前写真撮影を行った。また、基準点を確認したところ数値に誤差があったため、レベルを用いて基準杭の標高確認を行った。

8月2日は、トータルステーションを用いて調査区内に富山大学第4次調査第1調査区の第13層検出部分及び第2調査区南西壁が重なることを確認後、調査区設定と写真撮影を行った。

8月3日は、トータルステーションを用い4−5及び4−6基準杭の標高を測り、トータルステーションを使う際の標高とした。そして、この座標を用いて調査区中央に十字の畔を設定した。清掃と写真撮影後、第1−1調査区、第2−1調査区、第2−2調査区の表土を除去した。

8月4日は、第1−1調査区の表土除去、第2調査区の掘り下げを行った。

8月5日は、第1−1調査区では富山大学第4次調査第1調査区と富山市教育委員会旧トレンチの一部が検出された。そして、富山大学第4次調査第1調査区内の埋戻し土を幅0.5m、深さ約0.4m掘り上げた。また、第1−2調査区でも表土除去を開始した。

8月6日は、第1−1調査区の写真撮影を行った。第1−2調査区では富山大学第4次調査第2調査区の一部を検出した。また、第2−1調査区では検出された富山市教育委員会旧トレンチを利用し、この内側にs−c′壁に沿って幅0.3mで第2調査区サブトレンチ①を設定した。

8月8日は、第1調査区ではE角から富山大学第4次調査第1調査区に接するように幅1mで第1調査区サブトレンチ①を設定した。第2−2調査区では同じく検出された富山市教育委員会旧トレンチ内において、w−c壁に沿って幅0.3mで第2調査区サブトレンチ②、w−d′壁に沿って幅0.3mで第2調査区サブトレンチ③を設定した。第2−2調査区では、富山市調査において報告書に「標示石（?）とも思われる礫」と記されている直径25㎝大の石を検出した。

8月9日は、第1−2調査区のK−a壁沿いに幅0.5mで第1調査区サブトレンチ②を設定した。

8月10日は、第1−1調査区では富山大学第4次調査第1調査区内を掘り下げ、写真撮影を行った。さらに、e−b壁に沿って幅0.5mで第1調査区サブトレンチ③を設定した。第1調査区サブトレンチ②ではゴミ穴が検出され、写真撮影をした。

8月11日は、第2−1調査区において富山市トレンチの底部を検出した。また、第2−2調査区のd′ −W壁で出土した土器の写真撮影と平面図作成を行った。

8月12日は、第1調査区サブトレンチ③をeからa′へ長さ2.6m、幅0.5mで拡張した。また、第1−2調査区ではd−N壁に沿って幅0.5mでサブトレンチ④を設定した。第2−1調査区では富山市トレンチ跡の平面図作成と写真撮影を行った。その後、s−b′壁に沿って幅0.5mでサブトレンチ④を設定した。第2−2調査区ではd′ −W壁出土土器及び直径25cm大の石付近出土土器の出土状況図を作成し、遺物を取り上げた。

8月18日は、第1−1調査区でサブトレンチ①の断面図を作成した。第2−1調査区では富山市教育委員会旧トレンチ調査状況の写真撮影を行った。

8月19日は、第1−1調査区で土手状盛土を確認するため、a′からEへ長さ2.44m、幅1.2mで第1調査区サブトレンチ⑤を設定した。また、第1調査区と第2調査区で断面図を作成した。

8月20日は、第1調査区では平面図と断面図を作成し、それとともにK−d壁沿いに幅0.2mのサブトレンチ⑥を設定した。第2−2調査区では平面図・断面図を作成した。

8月21日は、第1調査区で平面図と断面図を作成した。また、第1調査区サブトレンチ⑥の幅を0.1m拡張した。第2−1調査区では盛土と考えられる黄褐色土を検出した。第2−2調査区ではd′ −W壁に沿って長さ1m、幅0.4mで第2調査区サブトレンチ⑤を設定した。

8月22日は、第1調査区では平面図・断面図の確認、修正を行った。第1−2調査区ではサブトレンチ④内のd角から0.7mを掘り下げた。第2−1調査区ではb′ −S壁に接する長さ約1.8m、幅約1mの範囲で、他と比べてやや黒ずんだ土を掘り下げた。その後、第2調査区の平面図・断面図を作成した。また、s点から=点までの範囲に幅0.5mで第2調査区サブトレンチ⑥を設定した。

8月24日は、第1調査区、第2調査区ともに平面図・断面図作成を行った。また、第2−1調査区ではb′点に長さ0.5m、幅0.5mの第2調査区サブトレンチ⑦設定した。

8月25日は、第1調査区、第2調査区ともに平面図・断面図の確認、修正を行った。また、土層確認のため第1調査区サブトレンチ④を掘り下げた。第2−2調査区では清掃と写真撮影を行った。

8月26日は、平面図・断面図を修正した。また、第1−1調査区の清掃と写真撮影を行った。

8月27日は、調査区全体の完掘状況を写真撮影後、平面図・断面図の確認、修正を行った。

8月28日は、第1調査区、第2調査区ともに平面図・断面図を確認、修正し、第1調査区を埋戻した。第2−2調査区では、w−c壁側に幅0.5mの第2調査区サブトレンチ⑧を設定した。

8月29日は、第1調査区の埋戻しを完了させた。第2調査区では平面図・断面図の確認後、第2−1調査区を埋戻した。また、発掘機材の洗浄を行った。

8月31日は、第2−2調査区の清掃と写真撮影の後、埋戻しを行った。また、発掘機材の洗浄を行った。発掘機材とコンテナハウスを搬出し、全作業が終了した。

発掘調査の結果、第1調査区と第2調査区で、富山市教育委員会の旧トレンチを検出した。

また、第１調査区では墳頂部縁辺をめぐる土手状盛土を検出し、それが途中で途切れる状況を明らかにした。さらに、富山大学第４次調査時に検出した風化岩片混じりの灰黄褐色土の広がりを確認した。第２調査区でも土手状盛土の一部を検出した。また、富山市調査の報告書に「標示石（?）とも思われる礫」と記された直径 25 ㎝大の石の周辺で、まとまった点数の土器片を検出した。　（蒲生侑佳）

第１図　第５次発掘調査参加者

調査にあたっては富山市教育委員会、古沢校下ふるさとづくり推進協議会々長、古沢校下自治振興会々長、杉谷地区自治会長、友坂地区々長ならびに地区の皆様に多大なご協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。　（髙橋浩二）

杉谷４号墳第５次発掘調査組織

調 査 主 体：富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）
調査担当者：次山淳（富山大学人文学部教授）・髙橋浩二（富山大学人文学部准教授）
調査参加者：北岡さゆり、進藤久美、津田明恵、牧本一輝、山中章太郎、蒲生侑佳、佐藤巧庸、清水秀直、泉田侑希、二口頌之、相場伸彦、浦口日捺、大上立朗、辻祐哉、鳥山悦世、西澤由理子、松永七星（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）
村口友美（以上、富山大学人文学部１年生）

注

(1) 富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
(2) 藤田富士夫 2017「呉羽山丘陵の古墳調査のころ－人・モノ・コトを振り返る－」『富山市考古資料館紀要』第 36 号、富山市考古資料館
(3) 「杉谷４号墳と四隅突出墳」出版事業編集委員会 2009『海を越えての交流－杉谷４号墳と四隅突出墳－』古沢校下ふるさとづくり推進協議会
(4) 黒崎　直 2012「調査に至る経緯」『杉谷６号墳－第１次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室
(5) 富山大学人文学部考古学研究室 2012『杉谷６号墳－第１次発掘調査報告書－』
富山大学人文学部考古学研究室 2013『杉谷６号墳－第２次発掘調査報告書－』
(6) 富山大学人文学部考古学研究室 2014『杉谷４号墳－第１次発掘調査報告書－』
(7) 富山大学人文学部考古学研究室 2015『杉谷４号墳－第２次発掘調査報告書－』
(8) 富山大学人文学部考古学研究室 2015『杉谷４号墳－第３次発掘調査報告書－』
(9) 富山大学人文学部考古学研究室 2016『杉谷４号墳－第４次発掘調査報告書－』

第1表　第5次発掘調査の作業過程

	全体	第1調査区		第2調査区	
		第1－1調査区	第1－2調査区	第2－1調査区	第2－2調査区
8月1日	コンテナハウス設営、ローリングタワー・発掘機材搬入、休憩所設置、基準杭確認、除草作業、発掘調査前写真撮影				
2	基準杭確認、調査区設定、写真撮影				
3	畔の設定、写真撮影	表土除去		表土除去	表土除去
4		▒		▒	▒
5		▒	表土除去	掘削開始	掘削開始
6		掘削開始、写真撮影	掘削開始	サブトレンチ①設定、富山市トレンチ検出	富山市トレンチ検出
7	休み				
8		サブトレンチ①設定			サブトレンチ②・③設定、石検出
9			サブトレンチ②設定		
10		写真撮影、サブトレンチ③設定	ゴミ穴検出、写真撮影		写真撮影
11					写真撮影、平面図作成
12		サブトレンチ③拡張、断面図作成（h－E壁）	サブトレンチ④設定	写真撮影、サブトレンチ④設定	平面図作成、写真撮影、遺物取上げ
13～17	盆休み				
18		断面図作成（サブトレンチ①）		写真撮影	平面図作成
19		▒サブトレンチ⑤設定・拡張、断面図作成（サブトレンチ③）		断面図作成（富山市トレンチ）	
20			断面図作成（サブトレンチ④）、サブトレンチ⑥設定	断面図作成（富山市トレンチ）、平面図作成	平面図作成、断面図作成（d′－W壁）
21		平面図作成、断面図作成（サブトレンチ②）	断面図作成（サブトレンチ①）、サブトレンチ⑤拡張	写真撮影、平面図作成	写真撮影、平面図作成、サブトレンチ⑤設定
22		▒　▒		サブトレンチ⑥設定	断面図作成（d′－W壁）
23	休み				
24	山砂搬入	平面図作成、断面図作成（サブトレンチ⑤）	断面図作成（サブトレンチ⑥）	断面図作成（a－b壁・h－S壁）、サブトレンチ⑦設定	断面図作成（w－d壁）
25		平面図・断面図確認・修正	平面図作成、断面図修正	平面図作成、断面図作成（a－b壁）	写真撮影、断面図作成（d′－W壁・w－d′壁・w－c壁）
26		▒清掃、写真撮影	平面図・断面図確認・修正、清掃	▒	平面図作成、断面図作成（w－c壁）
27	清掃、写真撮影	▒	▒	平面図・断面図確認	平面図・断面図確認
28		▒埋戻し	▒埋戻し	断面図作成（s－c壁）、平面図修正	平面図作成、サブトレンチ⑧設定
29		▒	▒	断面図確認・修正、写真撮影、埋戻し	平面図作成、断面図作成（w－c壁）、平面図・断面図確認・修正
30	休み				
31	機材洗浄、発掘機材・ローリングタワー・コンテナハウス搬出				清掃、写真撮影、埋戻し

▒▒▒▒▒ は作業期間を表す

第2章　既往の調査と第5次調査の目的

今回発掘を行う墳頂部については、1974年に富山市教育委員会による調査が実施されている。また、2015年には、富山大学人文学部考古学研究室による第4次調査が墳頂部周辺で行われている。この章では、今回の発掘と関連するこれら既往の調査成果を中心に述べる。

なお、富山市教育委員会による調査と富山大学考古学研究室による第1～4次調査の成果については、概要をまとめたものがあるので合わせて参照されたい（富山大学人文学部考古学研究室2015a・2015b・2016）。　（高橋浩二）

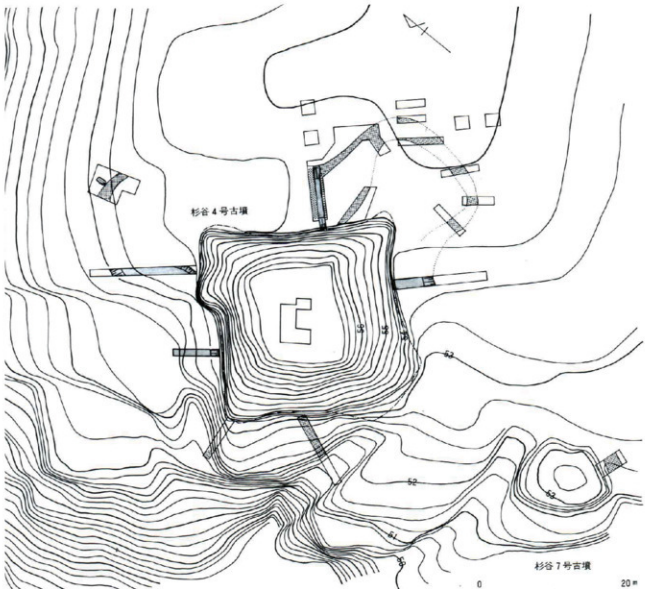
1．富山市教育委員会による調査の成果

杉谷古墳群内の1番塚古墳、2番塚古墳、3番塚古墳、4号墳、5号墳、6号墳、7号墳については、富山市教育委員会による発掘調査が実施され、その概要が報告された（富山市教育委員会1974）。4号墳においては、計19箇所のトレンチが墳丘周辺と墳裾部および墳頂部にそれぞれ設定され（第2図）、墳形と規模、墳丘と周溝の遺存状況、そして墳頂部の確認などが行われた。その結果、山陰地方（島根県など）に特徴的な弥生時代の墓制である四隅突出型墳丘墓であることが明らかにされた。富山市教育委員会が実施した4号墳の発掘調査成果の概要は次の通りである。

1．現墳丘については、「一辺が約25mの方形を基調」とし、「高さは3m余で全体に扁平な様相を示す」とされる。また、その形態は「若干墳裾が内湾する」ことから、「外形的には四隅突出的様相を示す」と説明されている。第2図を見ると、墳裾の内湾は特に北東側と南東側で顕著なようである。ただし、「北西部及び南側コーナー部では後世の溝状加工等がありやや変形している」とされる。この他、「墳頂部は10～12mの平坦部を形成」し、「墳頂部直前でゆるやかな段がみられる」ことが指摘されている。

2．墳丘周辺と墳裾部については、北側・東側に突出部と周溝、北西側・南東側・北東側の墳裾部に周溝が確認されている。その結果、4号墳は、北側突出部から東側突出部までの周溝を含めた一辺の長さが47～48mを測る四隅突出型墳丘墓と判断された。また、突出部の形状は、東側突出部では撥形を成すと推定され、「墳丘コーナーより約12m突出」するとされている。

周溝については、北側突出部基部のトレンチと北東側墳裾部のサブトレンチにおいて底部が平らな逆台形の断面形を呈し、東側突出部前面部では途切れずに巡ることが明らかにされた。また、北側突出部先端のトレンチでは、幅の狭い周溝を検出している。こうした東側突出部と北側突出部前面部の様相から、周溝は突出部前面部において幅「1m20㎝前後」で「四周連係する」と想定された。北側突出部先端のトレンチでは、他に周溝のすぐ外側で「長径120㎝、短径70㎝の長円形状土壙」が検出されている。北西側・南東側では、検出状況から、底面が平らで幅の広い周溝が確認されている。南東側墳裾部に設定されたトレンチでは「中層に焼土層が存在し、平安代須恵器がこれを中心に上下の層より出土した」と説明されている。なお、報告書記載の周溝の幅及び深さは、北側突出部基部のトレンチで「幅11m、深さ1m20㎝」、北東側墳裾部のサブトレンチで「幅7m50㎝、深さ1m30㎝」、南東側墳裾部のトレンチで「幅5

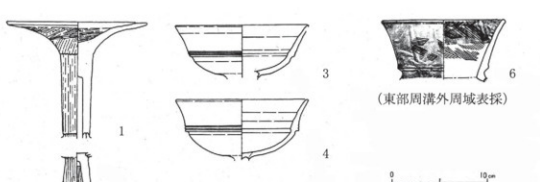


第２図　杉谷４号墳測量図及びトレンチ配置図（富山市教育委員会1974掲載図の縮尺を1/500に改変）

m（確認内で）、深さ1m10㎝」をそれぞれ測る。周溝の調査に関しては、その多くが掘削されずに平面形のみの確認に留められている。

この他、墳丘について貼石は存在しないことが指摘されている。

3．墳頂部においては、「約5m×4mのトレンチ」を設定し（第２図）、その区域内の表土が「20㎝位」除去された。その結果、「地山土や黒色土の斑文をもつ盛土」が見つかり、トレンチのほぼ中央に「260㎝×130㎝」の長楕円形の範囲（富山市教育委員会1974の図版15（上）を参照）が検出された。また、その範囲内には、「特に25㎝大の標示石(?)とも思われる礫」が１点確認され、それを中心にして高杯脚部、高杯杯部、壺または甕の口縁部から頸部など４点の土器（第３図－1～3・5）が出土した。長楕円形の範囲に関しては、「他に比べやや黒ずんでおり」、土器の出土や標示石と考えられる礫が発見されたことから「土壙ともみれる」としている。なお、墳頂部のトレンチでは、墓壙の位置や範囲、規模そして墳丘盛土の構造などについ



第３図　杉谷４号墳出土土器（縮尺1/4、富山市教育委員会1974）

てその内容が不明である。

4. 遺物としては、北西側墳裾部トレンチ周溝内底部出土の高杯杯部（第３図－4）、墳頂部トレンチ出土の高杯脚部、高杯杯部、壺または甕の口縁部から頸部などがある（第３図－1～3･5）。また、東部周溝外周域で採集された外面及び内面の一部に赤色顔料が施された「複合口縁状の壺形土器」がある（第３図－6）。出土土器の時期については、古式土師器とされ、「大局的には北陸土師器第１様式（吉岡 1967）に比定できる」と考察されている。

北陸土師器第１様式は、以降の調査研究により、石川県北加賀における月影式と並行すること（橋本 1975）、月影式は月影Ⅰ式・Ⅱ式に区分されること（谷内尾 1983）、そして、月影Ⅱ式の新段階は畿内系や東海系などの外来系土器が流入し、月影式土器の変質・解体が土器組成に見られる白江式（漆町５群・６群に対応）に分離されることが明らかにされた（田嶋 1986）。土器様式の並行関係については、月影式は畿内の庄内式に並行し弥生時代終末期の土器とされ、白江式は庄内式後半期に並行し弥生時代終末期あるいは古墳時代初頭の土器とされている。

5. 調査の結果、４号墳は、当時島根県のみで確認でき「古墳時代初期の在地型古墳の典型」とされた「四隅突出形古墳」と比べ、規模や貼石の不在といった差異を除けば「時期的にも同種のものとできる」と結論付けられた。なお、本調査の担当者であった藤田富士夫は、４号墳を「いわゆる四隅突出形古墳の一種である」と評価している。

調査当時、４号墳は、古墳時代初期の古墳の一形態とみられていたため「四隅突出形古墳」とされたが、土器の編年研究が進展する中で、近藤義郎によって、墳墓形態や外部構造、埋葬施設、副葬品などに顕著な地域性が見られる主に盛土によって墓域を画し形成する墳墓を弥生時代の墳丘墓とする見解（近藤 1977）が示された。この中で近藤は、楯築遺跡（楯築墳丘墓）で採集した土器片が山陽の弥生時代後期の土器様式である「上東式」に比定されることを考察した。また、四隅突出形の墳墓については「たしかに裏日本の一部では島根県を中心に四隅突出型という定式化を歩みはじめたが、それも地域的に限られて、しかも一時的なあらわれにすぎなかった」としている。この結果、四隅突出形の墳墓を古墳と把握する見方は再検討を迫られた。近藤の見解が提示されて以降、山陰では、山陽や畿内の土器との並行関係の検証や墳墓から出土した供献土器の編年的検討などが行われ、それによって四隅突出形の墳墓は弥生時代

後期を中心に築造された墳丘墓であることが明らかにされた。そして、1980年代には、山陰でも四隅突出形の墳墓を弥生時代の墳丘墓とする認識が次第に形成されていった。このような成果から、4号墳のように四隅の部分が突出する構造の方形墳丘墓は、今日一般的に「四隅突出型墳丘墓」と呼称されている。（清水秀直）

2. 富山大学人文学部考古学研究室による第4次調査の成果

第4次調査では、東側突出部における盛土及び旧表土と地山との関係を確認するとともに、墳丘盛土の遺存状況と層位を明らかにする目的で、東側突出部中軸線に沿った墳丘斜面部に長さ16m、幅1mの第1調査区を設けた。同じく墳丘盛土の遺存状況と層位を確認し、周溝部から墳丘斜面部を通した層位を解明する目的で、墳丘北東側の墳丘斜面部から周溝部にかけて長さ16m、幅1mの第2調査区を設けた。これらのうち第1調査区西端から約0.8m、第2調査区南西端は、今回の第5次調査第1－1調査区、第1－2調査区と重複する箇所である。主な調査成果は次の通りである。

（1）第1調査区

第1調査区の基本層序は、表土、墳丘上の堆積土、墳丘外周削平後の堆積土、墳丘盛土、旧表土、地山である。

墳丘斜面の形状　墳丘は、墳頂側の調査区西端から約1.75m地点までは平坦である。墳丘斜面は、調査区西端からY＝－2478.250～－2475.960の範囲で約25度の傾斜が見られるが、Y＝－2475.960から東へ約0.26mの範囲では、平坦なテラス状になっていることから、これは墳丘が後世の削平を受けたことによるものと考えられる。Y＝－2475.700～－2470.190の範囲では約10度の角度で傾斜しているため、墳丘東側は全体的に緩やかに傾斜していたことが確認できた。

墳丘裾部の状況　墳丘の裾部及び外周は開墾などによって広範な削平を受けている。墳丘裾部では、旧表土（第26・27層）の黒褐色土及び暗褐色土を検出した。旧表土層上面の標高は約54.210～54.420mであった。現在の地表面の標高が約53.970～54.050mであることから、墳丘築造時の地表面は現在より約0.2～0.4m高かったことが伺える。

墳丘盛土　堆積土を掘削除去した墳丘盛土上層では、墳頂部側から順に第9・10・20～24層の墳丘盛土を確認した。第11～20層は、墳頂部において調査区西端から東西3.4m、幅0.5mの範囲での断ち割り調査によって確認した。

第9・10層は墳頂部を平らに整えるように積まれており、これらを掘削除去すると第11・12・13・14・17・19層が見られた。第9層は暗褐色粘質土で、約0.04mの厚さで水平に堆積する。第10層は黒褐色弱粘質土で、約0.2mの厚さで堆積している。第11層は褐色粘質土で、約0.28mの厚さで堆積している。第12層は黄褐色粘質土で、約0.18mの厚さで堆積している。第13層は白色風化岩片を3%含む灰黄褐色土で、約0.4mの厚さで堆積し、第11・12・14・15層とは性質が異なり、土が固くしまっているため層の境が明確である。

第14層は暗褐色粘質土で、5～10㎜の黄褐色土粒が40%含まれる。第15～19層は、黄褐色土粒を含む黒褐色粘質土であるが、各層に含まれる黄褐色土粒の大きさ、割合が異なる。第15

層は2～5㎜の黄褐色土粒を25%含み、厚さ0.02～0.04mの黒褐色土と黄褐色土が互層状に堆積している様子が確認できた。第16層では2～5㎜の黄褐色土粒を3%含む。第17層は2～5㎜の黄褐色土粒を15%含む。第18層は1～2㎜の黄褐色土粒を2%含み、約0.04mの厚さで堆積している。第19層では2～5㎜の黄褐色土粒を30%含むことを確認した。第20層は黄褐色粘質土で、Y=－2477.180～－2476.560の範囲で厚さ約0.15mの緩やかな山なりに積まれていた。第14～19層は墳丘外側から内側に向かって傾斜することから、地山起源の黄褐色土である第20層を土手状に巡らせた後、墳丘外側から内側に向かって土を盛って墳丘を構成している様子が確認できた。

遺物　土器片17点（うち土師器片13点、須恵器片4点）、陶器片1点、磁器片5点、瓦片2点、煉瓦片2点が出土した。

(2) 第2調査区

第2調査区の基本層序は、表土、墳丘上及び周溝上の堆積土、周溝埋土、墳丘盛土、旧表土、地山である。ここでは、第5次調査に関連する土層である第1・2層及び墳丘盛土の第36～39層、第43層を中心にしてまとめる。

表土（第1層）は黒褐色砂質土であり、厚さ約0.1mで堆積する。第2層は墳丘上の堆積土で、暗褐色砂質土である。厚さ約0.1mで堆積する。

墳丘盛土　第35～51層が墳丘盛土に該当する。墳丘盛土は、Y=－2478.330から始まっていることが確認できた。第2調査区では墳頂部側に厚さ0.2mの盛土が比較的水平に盛られている状況が見られたが、第1調査区のように墳頂部端部に盛土を巡らせた後に、墳丘外側から内側へ向かって土質の異なる土を積むような状況は、調査区内では認められなかった。

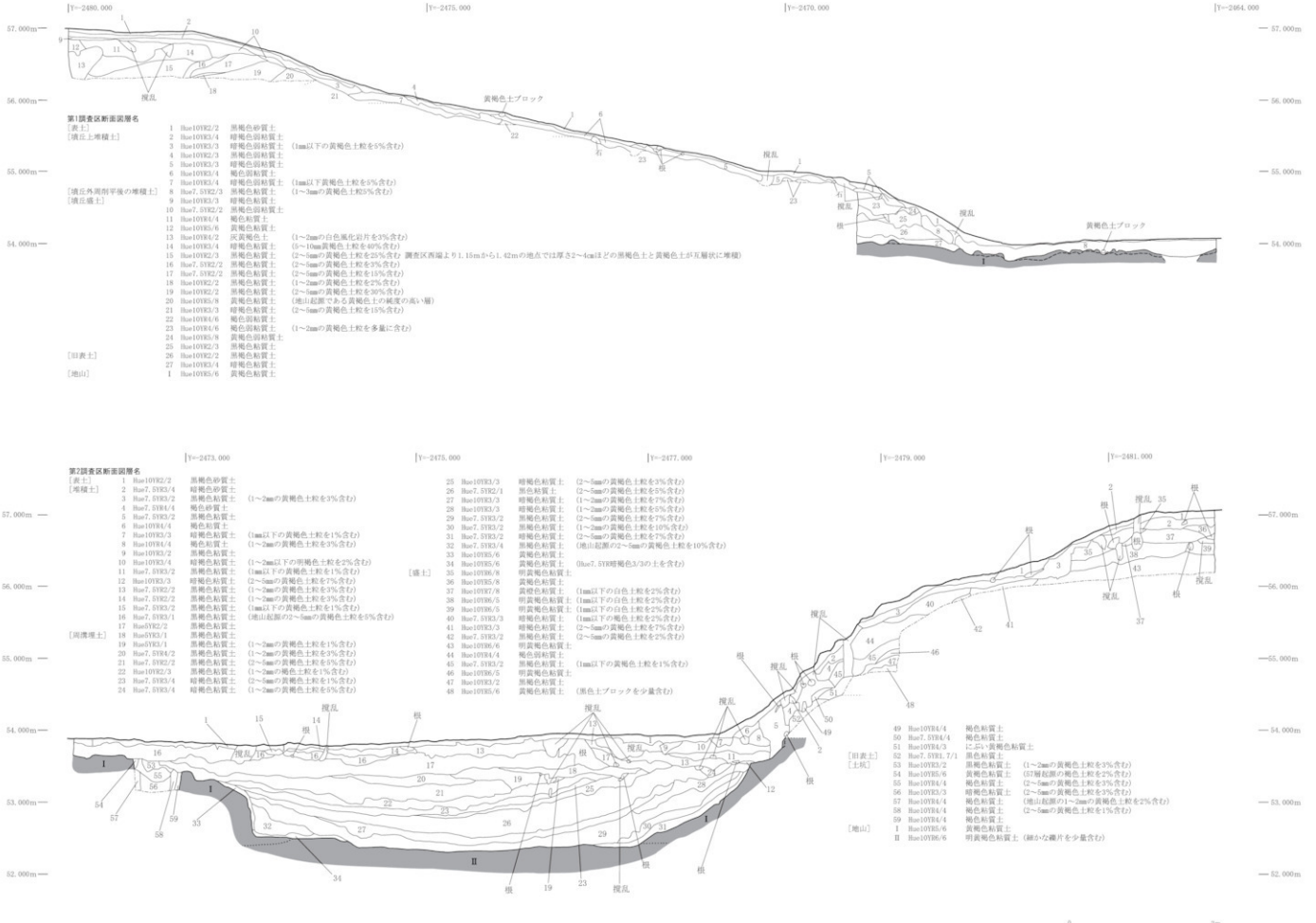
第36層は黄褐色粘質土で、厚さ約0.15mで堆積する。第37層は1㎜以下の白色土粒を2%含む黄橙色粘質土で、厚さ約0.2mで水平に堆積する。第38層は1㎜以下の白色土粒を2%含む明黄褐色粘質土で、厚さ約0.2mで比較的水平に堆積する。第39層は第38層と土質が類似しているため、同一層の可能性がある。第36～39層の上面は平坦になっている。

第43層は明黄褐色粘質土である。層の厚さは0.1～0.3mで、墳頂部側に向かって徐々に厚く盛られていることが確認できた。

周溝　周溝の断面形は逆台形で、底面は平らである。現状における周溝の規模は幅8.35mで、周溝内側斜面の深さは1.15m、周溝外側斜面の深さは0.96mを測る。しかし、周溝上面は後世に削平されており、本来の周溝の幅は約8.7m、最深部の深さは約1.56mになると推定した。

周溝内側斜面上端の標高は53.488mであるが、後世の削平を受けているため、本来の上端は標高53.840m付近に存在したと考えられる。周溝内側斜面下端の標高は52.341mである。周溝外側斜面上端の標高は約53.500mである。しかし、旧表土が見られないことなどから、周溝外側斜面上端も後世の削平を受けているものと考えられる。下端の標高は52.537mである。周溝外側における地山上面の標高は53.590mであり、墳丘側におけるその標高と比べて0.25m低いことが確認できた。

遺物　土器片（弥生土器または土師器）45点、陶器片1点、黒曜石剥片1点、石製品1点が出土した。周溝内の遺物は全体的に周溝中央から外側にかけて集中し、層位から見ると周溝の



第4図　第4次調査第1調査区（上）・第2調査区断面図（縮尺1/50、富山大学人文学部考古学研究室2016）

中層から下層にかけて数多く出土している。墳丘側下層からはほとんど出土していない。このことから、多くの遺物は周溝埋没過程において、周溝外側から流入したことが考えられる。

（泉田侑希）

3．調査の課題と目的

富山市教育委員会 1974 の調査によって、杉谷 4 号墳が四隅突出型墳丘墓であること、また周溝の存在や墳裾（基底部）の状況、周溝埋土の層位、そして墳頂部上面の状況などが確認された。しかしながら、墳形や規模の確認、周溝部や墳裾部、墳頂部における遺存状況の確認が主な目的であったため、トレンチは墳裾部や外周部には設けられたが、墳丘斜面には入れられていなかった。また、墳頂部についても、樹木を避けるかのような形で約 5m×4mの限られた面積、深さが調査されたにすぎない。富山市教育委員会 1974 の報告書には、墳頂部における盛土の遺存状況や層位などについては未記載であり、断面図等の図面も掲載されていない。また、25㎝大の標示石(?)とも思われる礫や、それを中心に他に比べてやや黒ずんだ土の範囲（260 ㎝×130 ㎝の長楕円形）が検出され、土壙の可能性が推定されているものの、やはり図面が未掲載で、正確な位置や層位的関係、さらに性格などは未解明のままである。

これらの課題を踏まえて、富山大学による第 4 次調査では、墳頂部縁辺に一部がかかる形で墳丘斜面部から周溝部にかけての 2 箇所に調査区を設定した。その結果、前節のように墳頂部縁辺や墳丘斜面部における表土や表土下堆積土の状況、盛土の遺存状況や層位、旧表土や地山との層位的関係などが明らかになった。ちなみに、第 1 次調査は東側突出部、第 2 次調査は南側突出部周辺、第 3 次調査は墳丘南東側墳裾部周辺、そして墳丘北西側の墳裾部と周溝部の確認を主目的とするものであり、富山大学による調査ではこれまで墳頂部中央に調査区を設定したことはなかった。

そこで、第 5 次調査では、墳頂部中央の樹木付近を中心に 4 分割して調査区を設定した。調査の目的については次の通りである。まず第 4 次調査との関係で記すと、①第 1 調査区で確認された土手状盛土のつながりをさらに調査するとともに、他の盛土とは傾斜方向、性質の異なる土層（13 層）については墓壙埋土である可能性も考えられたため、墳頂部へどのように展開するのか明らかにすること。②富山市教育委員会 1974 のトレンチ配置図（7 頁第 2 図）と富山大学による調査区配置図とでは部分的に一致する等高線の箇所は見られるものの、全体的にはズレが大きく、合成することが難しい。そこで、富山市教育委員会の旧トレンチを検出することで、両図を合成する根拠とすること。③墳頂部における墳丘盛土の遺存状況や層位的関係を明らかにすること。④富山市教育委員会の調査で検出された標示石とも思われる礫や、周辺と比べてやや黒ずんだ土色の範囲を再確認して精査し、正確な位置を記録するとともに、墳丘盛土との平面的関係や層位的関係を把握すること。⑤墳頂部と富山大学第 4 次調査第 2 調査区の断面図とを合成することで、周溝部から墳頂部までを通して断面図を作成し、層位的関係を明らかにすること。そして、⑥富山市教育委員会の調査では、墳頂部から 4 点の土器の出土が報告されているが（8 頁第 3 図－1～3・5）、墳頂部をさらに広く調査することで、築造時期を検討するための土器資料を得ることである。

（髙橋浩二）

参考文献

出雲市教育委員会 1995『四隅突出型墳丘墓の謎に迫る』出雲・西谷墳墓群シンポジウム、ワン・ライン

近藤義郎 1977「古墳以前の墳丘墓－楯築遺跡をめぐって－」『岡山大学法文学部学術紀要』第 37 号（史学篇）、岡山大学法文学部

島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター2003『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 16、島根県教育委員会

妹尾周三 1993「四隅突出型墳丘墓について－出現の要素と貼石方形墳丘墓からの概観－」『古文化談叢』第 30 集（上）、九州古文化研究会

髙橋浩二 2015「研究史」『杉谷 4 号墳－第 2 次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室

田嶋明人 1986「考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡』Ⅰ、石川県埋蔵文化財センター

富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』

富山市教育委員会埋蔵文化財センター2007『四隅突出型墳丘墓を探る～首長と地域社会～』富山市教育委員会

富山大学人文学部考古学研究室 2014『杉谷 4 号墳－第 1 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2015a『杉谷 4 号墳－第 2 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2015b『杉谷 4 号墳－第 3 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2016『杉谷 4 号墳－第 4 次発掘調査報告書－』

橋本澄夫 1975「弥生土器－中部　北陸 4－」『考古学ジャーナル』No. 111 、ニュー・サイエンス社

東森市良 1989『四隅突出型墳丘墓』考古学ライブラリー54 、ニュー・サイエンス社

藤田憲司 1979「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第 64 巻第 4 号、日本考古学会

婦中町教育委員会 2002『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』

谷内尾晋司 1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第 26 号、石川考古学研究会

吉岡康暢 1967「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』No. 6、ニュー・サイエンス社

第3章　発掘調査の成果

1．測量基準点

杉谷4号墳については、平成23年度に富山大学学長裁量経費の交付を受けて、株式会社共和（和歌山市）に依託し、平面直角座標系第Ⅶ系（世界測地系）による測量基準点の設置、ならびに4号墳および7号墳を含む周辺現況地形の3D測量を実施した。

設置した基準点は、第2表および第5図のとおりである。3級基準点3−1、3−2は、4号墳東側の駐車場ガードレールのコンクリート基礎内に設置し、4級基準点4−1〜4は墳丘の周囲に、4−5および4−6は墳丘上に設けている。

今回の調査では、墳頂部付近に位置する4−5、4−6を主として使用したが、当初の測量において標高の記載がなかったため、器械点を4−4、後視点を4−3とし、トータルステーションを用いて標高を計測した。その結果、4−5の標高は56.813m、4−6の標高は56.234mとなった。なお、出土遺物の標高を測る際の値は、基準点3−1から移動した値をもちいた。この時の4−5の標高は56.816m、4−6は56.223mであり、若干の誤差がある。（次山　淳・蒲生侑佳）

2．調査成果

（1）調査の目的と調査地区の設定

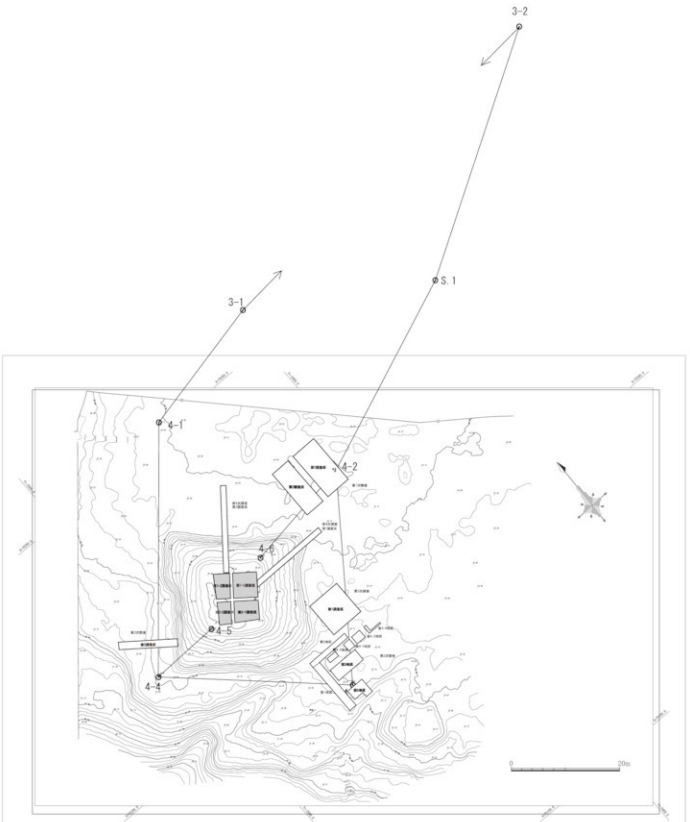
墳頂部を調査の対象とするにあたり、①1974年の富山市教育委員会による調査のトレンチ位置の確認、および②墓壙等埋葬施設の確認を主な目的とした。

後者では、1974年の調査で認識された標示石(?)と黒ずんだ土の範囲、その性格の確認[1]、および昨年の第4次調査第1調査区で検出された第13層の確認と広がりの追究を課題とした。第13層は調査区の西端、すなわち墳丘中心側で認められ、他の土層と同様に中心に向かって傾斜するものの、その外側に位置する第14層と一連の堆積ではなく、むしろ傾斜が急角度で、第14層を掘り込んでいるようにも観察された。また、風化岩片を含みしまりが強く周囲の土層とは性質が異なるという調査所見を得た。こうした特徴から、墓壙に関係する土層の可能性を想定している[2]。

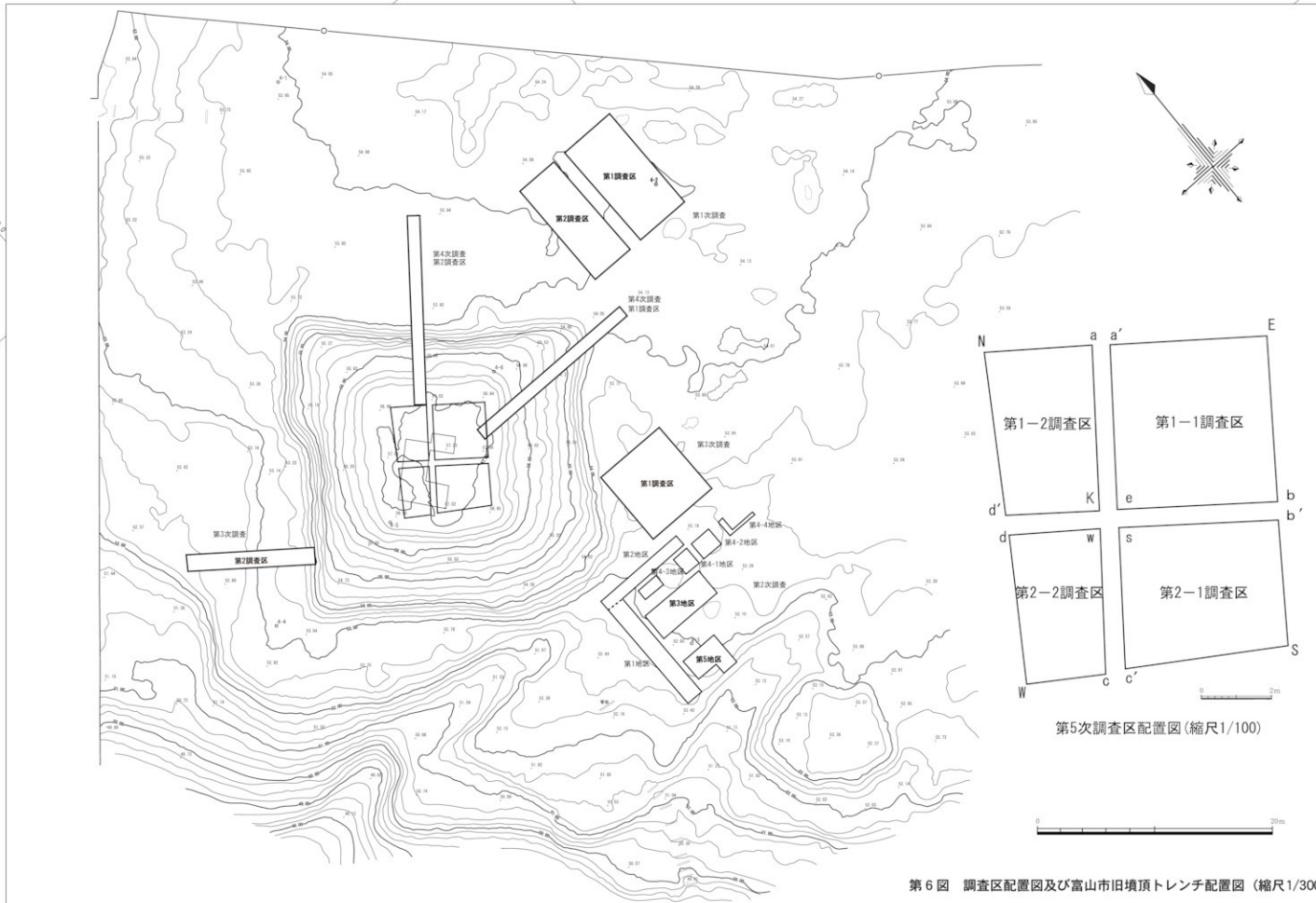
以上の観点から調査区の設定は、①推定される富山市旧トレンチの範囲が含まれること、②第4次調査における第1調査区第13層との関係がわかるように、同調査区墳頂部分を調査範囲

第2表　調査区基準杭一覧

杭名	X座標	Y座標	標高（m）	杭名	X座標	Y座標	標高（m）
3-1	75256.026	−2448.816	54.347	4-4	75216.280	−2503.809	53.025
3-2	75262.033	−2377.189	53.328	4-5	75216.644	−2490.721	
4-1	75251.309	−2473.559	53.959	4-6	75220.641	−2475.650	
4-2	75223.746	−2454.798	53.797	S1	75237.533	−2418.611	54.219
4-3	75192.102	−2477.931	52.938	国土座標第Ⅶ系（世界測地系）に基づく			



第５図　調査区基準杭配置図（縮尺1/700）



第5次調査区配置図(縮尺1/100)

第６図　調査区配置図及び富山市旧墳頂トレンチ配置図（縮尺1/300）

に含めること、さらに③ 第4次調査第2調査区との連続的な断面図を作成するため、同調査区南端と接することを念頭に、墳頂平坦面のできるだけ広い範囲を対象とするようにおこなったが、樹木との関係で北東辺 7.980m、北西辺 9.506m、西南辺 7.550m、南東辺 8.844m、面積約 71.0 ㎡の不整方形の調査区となった。

この調査区に対して、その中央部に十字形の土層観察用畔を設けた。まず第4次調査第2調査区の東側壁面の延長上で土層断面が検討できる位置に北東－南西ラインを設定した。これに対し調査区中央の樹木を避け、直交する軸を設け東南－西北ラインとした。それぞれに対し 50cm幅で土層観察用の畔を設け、調査区全体を4分割した。東と北の区画を第1調査区、南と西の区画を第2調査区とし、それぞれ東の区画を第1－1調査区、北の区画を第1－2調査区、南の区画を第2－1調査区、西の区画を第2－2調査区と呼ぶこととした（第6図）。記述にあたっては便宜的に調査区内各壁の端にアルファベット等の記号をつけた。これらは各平面図のとおりである。（次山　淳）

（2）過去の調査（第1調査区側）

富山市トレンチ　富山市教育委員会 1974 による杉谷 4 号墳の発掘調査で墳頂に設定されたトレンチは、長辺約 6m、短辺約 4mの長方形で北隅を 2.0×0.8m、南東中央部を 2.8×2.0m の範囲で欠いている（第6図）。第1－1調査区内では富山市旧トレンチ東隅、第1－2調査区では北隅の検出を予想した。また、屈曲部は畔に接する位置関係にあると予想した。

（3）第1調査区の調査成果（第7～10図）

第1調査区の調査地の現況　調査地は墳頂北東部であり、墳頂外表は平坦であるが、調査区外縁部から墳頂中央の樹木へ向かって約 0.16m高まっている。a′ 点から e 点へ約 1.1m地点で直径約 1.15mの樹木が存在する。

墳頂外表の標高は、調査区北隅（N 点）で 56.930m、東隅（E 点）で 56.910m、南隅（b 点）で 56.940m、西隅（d 点）で 56.970m、第1－1調査区西隅（e 点）で 57.060mである。

基本層序　調査区の基本層序は、大きく以下のとおりである。

表土：暗褐色を示す砂質土（第1層）である。厚いところでは約 0.4mある。

表土下堆積土：褐色から暗褐色、一部黒褐色を示す粘質土（第2層）、明黄褐色から黄褐色土粒を含む暗褐色粘質土（第3層）である。

第4層以下は盛土である。

第1－1調査区の発掘経過　表土（第1層）を約 0.1m掘り下げたところで表土下堆積土（第2層）を検出した。第2層上面で、富山市教育委員会旧トレンチを検出した。

a′ 点付近では第3層の下に、明黄褐色粘質土（第5層）を検出した。また、第2層は墳頂中心部へ向かうにつれて厚くなり、最も薄い地点で 0.02m、最も厚い地点で 0.20m堆積している。

E 点から b 点方向へ 1.55～2.95mの範囲で、第4次調査の第1調査区断ち割り部分の埋戻し土を掘りあげ、土層断面を確認した。その後、第4次調査第1調査区の風化岩片を含む灰黄褐色土（第4次調査第1調査区第13層）の墳頂での広がりを確認する目的で b－E 壁に沿って、第4次調査第1調査区の範囲に収まるようにサブトレンチ①を幅 1mで設定した。

本調査の主目的である墳頂中央部に存在すると予想した埋葬施設を確認するため、e－b壁に沿って幅 0.5mでサブトレンチ③を設定した。また、富山市旧トレンチの断面を確認する目的で、サブトレンチ③をe点からa′点方向へ幅0.5m、長さ1.6mの範囲で拡張した。

第1－2調査区で地山由来の明黄褐色粘質土（第5層）は第4次調査第1調査区において検出された第20層であると推測されたため、それらの繋がりを確認する目的でa′－E壁に沿って長さ1.2m、e－a′壁に沿って幅0.5mでサブトレンチ⑤を設定した。その後、より広い範囲で土層を確認するため、a′－E壁に沿って長さ2.5m、e－a′壁に沿って幅1.2mに拡張した。

富山市教育委員会旧トレンチ　e点からa′点方向へ0.5m～1.85mの間でe点からb点方向へ1.5mの範囲に、しまりが異なる暗褐色弱粘質土（第24層）を確認した。この範囲は富山市教育委員会 1974 に記載されたトレンチと重なる位置関係にあるため富山市旧トレンチと判断した。底面の標高は56.714～56.798mで、厚さは約0.2mである。

サブトレンチ①　第2層は表土下堆積土、第4・7・20・21層は盛土である。

a′－E壁には表土下堆積土（第2層）、褐色粘質土（第4層）の下に黒褐色粘質土（第7層）がある。

b－E壁には表土下堆積土（第2層）の下にE点からb点方向へ0.8mの地点から黄褐色土粒を含む暗褐色粘質土（第20層）が厚さ0.12mで存在し、第2層、第20層の下には黒褐色粘質土（第7層）がある。

ﾛ－イ壁には表土下堆積土（第2層）の下に厚さ約 0.08mで褐色粘質土（第4層）、その下に厚さ約0.16mで黄褐色土粒を含む暗褐色粘質土（第20層）が墳頂中心部へ向かって傾斜し、第20層の下には黒褐色粘質土（第7層）がある。また、第4層の下から、第20層と第7層を分断するように風化岩片を含む褐色粘質土（第21層）を検出した。

ﾛ－ハ壁には表土下堆積土（第2層）の下に厚さ0.1mから0.24mで褐色粘質土（第4層）、その下に黒褐色粘質土（第7層）がある。また、第4層の下から、第7層を分断するように風化岩片を含む褐色粘質土（第21層）を検出した。

ﾛ点付近で風化岩片を含む褐色粘質土（第21層）を検出したため、東部は標高56.600m地点以下を掘り下げていない。

サブトレンチ③　第2層は表土下堆積土、第4・10・13～19層は盛土、第24層は富山市旧トレンチ埋戻し土である。

第2層の下には厚さ0.1mで褐色粘質土（第4層）、墳丘中心へ向かうにつれて厚くなり一部に風化岩片を含む明黄褐色粘質土（第13層）がある。第13層はb点からe点へ向かって約3m地点までは厚さ0.08mで存在し、この地点から中心部へ向かって次第に厚さを増し、13層と13′層を合わせて最大で0.5mとなる。3m地点から第13層と第13′層の間に褐色粘質土（第14層）が存在し、第13′層の下からは厚さ0.05mで墳頂中心部へ向かって緩やかに傾斜するにぶい赤褐色粘質土（第18層）を検出した。b点からe点方向へ約4.1m地点に存在する樹木の根を境に、第13′層の下に黒褐色粘質土（第17層）が現れる。サブトレンチ③底面では黄褐色土粒を含む黒褐色粘質土（第19層）を検出した。最深部の標高は56.240mである。

平面で確認した富山市旧トレンチを断面でも確認するため、サブトレンチ③をe点からa′点方向へ幅0.5m、長さ1.6mの範囲で拡張した。拡張部の表土上面から0.06m下で富山市旧

第７図　第１−１調査区平面図・断面図（縮尺1/50）

トレンチ埋戻し土の上面を検出した。厚さは約0.2mである。

拡張部の層順は、表土下堆積土（第2層）、第4・13・14・13′・16・17・15・10層であり、e点付近と同じ層順を示す。第13層はe点からa′点へ約0.45m地点で取束している。上下関係は明らかではないが、第17層に隣接する黄褐色土粒を含む黒褐色粘質土（第16層）を検出した。富山市旧トレンチの下で第16層と第17層の下に入り込むように黄褐色土粒を含む極暗褐色粘質土（第15層）、第15層に入り込むように黒褐色粘質土（第10層）を検出した。

サブトレンチ⑤　第2・3層は表土下堆積土、第5・7層は盛土である。

黄褐色土粒を含む暗褐色粘質土（第3層）を掘り下げたところ、風化岩片を含む明黄褐色粘質土（第5層）が検出された。はじめに設定したトレンチの範囲では第5層と第4次調査第1調査区第20層との繋がりが不明瞭であったため、より広い範囲で確認するため、サブトレンチ⑤を幅1.2m、長さ2.5mに拡張した。

拡張区の表土下堆積土を除去した段階で、第5層がa′点からe点方向へ0.84m、a′点からE点方向へ1.5mの範囲で確認され、傾斜して第7層の下へ続いていることが明らかになった。

第5層の上には、表土下堆積土である第3層が、第7層の上には第2層が堆積している。

第1−2調査区の発掘経過　表土（第1層）を除去した後、富山市旧トレンチを検出する目的で第1−2調査区の全体を掘り下げたところ、a点付近では第4次調査第2調査区の西端における埋戻し土、K点付近では富山市教育委員会の発掘調査報告書に記載された推定土壌と思われる黒褐色弱粘質土（第23層）を検出した。K−d壁付近では明黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第15層）、a−N壁付近では黄褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土（第4層）を検出した。この時点で第15層の標高が第1−1調査区の富山市旧トレンチ底面より低かったため、平面的に富山市旧トレンチの範囲を確認できなかったと判断した。第15層と第4層の境を検出するため、K−d壁からa−N壁方向へ掘り下げ、標高が56.750mの地点付近でこの二層の境を検出し、盛土の状況を確認するためサブトレンチを設定した。

第4次調査第2調査区から墳頂中心部へ向かう盛土の状況を確認する目的で、K−a壁に沿って幅0.5mでサブトレンチ②を設定した。

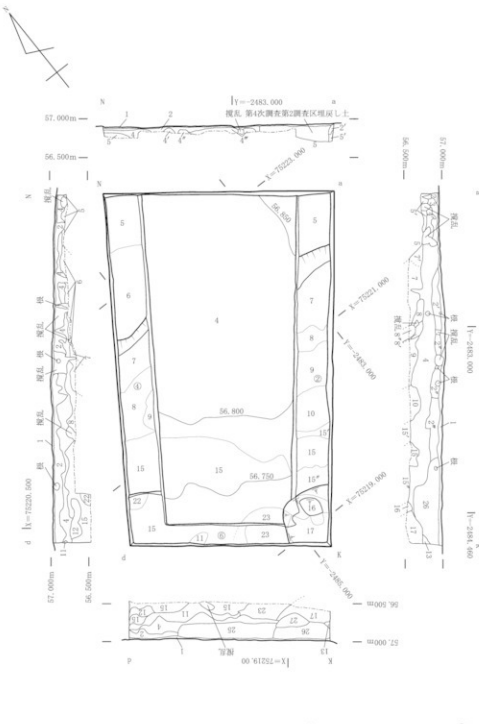
サブトレンチ②内で見られた明黄褐色粘質土（第5層）の広がりを確認する目的でd−N壁に沿って幅0.5mでサブトレンチ④を設定した。また、第12層と第15層の関係を確認するためにd点からN点方向へ0.7mの範囲をさらに0.2m掘り下げた。

第1−2調査区では富山市旧トレンチを平面的に確認できなかったため、K−d壁沿いに幅0.2mで推定土壌に接する長さでサブトレンチ⑥を設定した。さらに、平面的に検出していた黒褐色弱粘質土(第23層)の範囲を断面で確認するため、サブトレンチ②に接するように拡張した。

サブトレンチ②　第2・2′・2″・2‴・3層は表土下堆積土、第4・4′・5・5′・7・7′・8・8′・8″・9・10・13・15・15′・15″・16・17層は盛土、第26層はゴミ穴の埋戻し土である。

表土下堆積土（第2・2′・2″・2‴・3層）の下に褐色粘質土（第4層）、暗褐色粘質土（第4′層）が存在し、第2‴層と第4′層を掘り込むかたちでゴミ穴の埋戻し土である黄褐色土粒を含む黒褐色粘質土（第26層）を検出した。

第4′層から順に、褐色粘質土（第13層）、黒色粘質土（第17層）・黄褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土（第16層）、黄褐色土ブロックを含む黒褐色弱粘質土（第15層）・黄褐色土ブ



第８図　第１−２調査区平面図・断面図（縮尺1/50）

ロックを含む褐色粘質土（第15′層）・黄褐色土粒を含む黒褐色粘質土（第15″層）、黄褐色土粒を含む黒褐色粘質土（第10層）、黄褐色土粒とわずかな風化岩片を含む暗褐色粘質土（第9層）、黄褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土（第8″層）・黄褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土（第8層）・黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第8′層）、黄褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土（第7層）、風化岩片を含む明黄褐色粘質土（第5層）・褐色粘質土（第5′層）がある。

黄褐色土粒を含む暗褐色粘質土（第3層）は、a点からK点方向へ0.7mの範囲で表土と暗褐色粘質土（第4層）の間でのみ検出した表土下堆積土である。第4・4′層の上面は平坦であり、標高56.560～56.800mで底面を検出した。

第4・4′層より下の土層はa点からK点方向へ向かって第5′・5・7・7′・8・8′・8″・9・10・15′・15・15″・16・17・13層の順に境を検出し、平面と断面で層序関係を明らかにした。その結果、最初に墳頂外側の第5′・5層が構築され、中心部に向かって順に第7・8・8′・8″・9・10・15′・15・15″・16・17・13層が盛土されている様子を確認した。

第4次調査第2調査区では中心部へ傾斜する土層を確認できなかったが、今回の調査で中心部へ向かって傾斜する盛土が第5層を起点に中心部へ向かって積まれていることを確認したため、第5′・5層を土手状盛土、その内側の層を盛土と判断した。

K点付近で見られた黄褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土（第16層）と黒色粘質土（第17層）については層序関係が判明しなかった。

サブトレンチ③で広範囲に見られた一部風化岩片を含む明黄褐色粘質土（第13層）に対応する褐色粘質土（第13層）は、K点から約0.1mの範囲でのみ検出された。

サブトレンチ④　第2層は表土下堆積土、第4～9・11・12・15・22層は盛土である。

黄褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土（第4層）から順に、黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第15層）、第7層に比べ黒色が強い黒色・明黄褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土（第8層）、黒色・明黄褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土（第7層）、黄橙色土ブロックを含む褐色粘質土（第6層）、明黄褐色粘質土（第5層）がある。d点付近の第4層内部から明黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第11層）が一部検出された。また、d点からN点方向へ0.7mの範囲をさらに0.2m掘り下げたことで、第15層の下に現れていた褐色の砂を含む暗褐色粘質土（第12層）は第15層に入り込んでいることが判明した。d点からN点方向へ0.7m、表土下0.35m地点から黒褐色粘質土（第22層）を検出した。

d点からN点方向へ1.5～2.04mの範囲で平面でのみ暗褐色粘質土（第9層）を検出した。土色やしまりなどからサブトレンチ②の第9層と同一の層と判断した。

サブトレンチ⑥　第2層は表土下堆積土、第4・11～13・15・17・23層は盛土、第25層は富山市旧トレンチ埋戻し土、第26・27層はゴミ穴の埋戻し土である。

表土下堆積土（第2層）の下から、黄褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土（第4層）、明黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第11層）、明黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第15層）を検出した。褐色の砂を含む暗褐色粘質土（第12層）は第15層の間に入り込んでいる。第4層の下に第11層と第15層を分断するかたちで黒褐色弱粘質土（第23層）が存在し、黒色弱粘質土（第17層）の下に入り込んでいる。断面ではK点からd点方向へ0.75mの地点から長さ1.25

m、深さ0.2mの範囲で、現存する富山市旧トレンチの埋戻し土の暗褐色弱粘質土（第25層）が検出され、これを掘り込むゴミ穴の埋戻し土である黄褐色土粒を含む黒褐色粘質土（第26層）、黄褐色粘質土（第27層）を検出した。褐色粘質土（第13層）はゴミ穴直下約0.08mの範囲で検出した。

サブトレンチ⑥では断面でのみ富山市旧トレンチと思われるしまりの異なる土層（第25層）を厚さ0.2mで検出したが、d点からK点方向へ2mの地点でゴミ穴によって撹乱されていたため、部分的な確認にとどまった。

第4層と第13層はゴミ穴による撹乱のため層序関係は判明しなかった。

ゴミ穴は黄褐色土粒を含む黒褐色粘質土（第26層）と黄褐色粘質土（第27層）の二層に分かれている様子を確認した。

ゴミ穴　K点付近からサブトレンチ⑥にかけて検出されたゴミ穴は、長径約1.16m、短径約0.76m、深さ0.38mの擂鉢形を呈する。内部の土は黄褐色土粒を含む黒褐色粘質土（第26層）で構成されるが、一部に黄褐色粘質土（第27層）がある。ゴミ穴は富山市旧トレンチを掘り込んでいるため、富山市教育委員会による発掘調査後に形成されたものと考えられる。ゴミ穴にはパイプとレインコートが埋められていた。

（4）墳頂部の土層

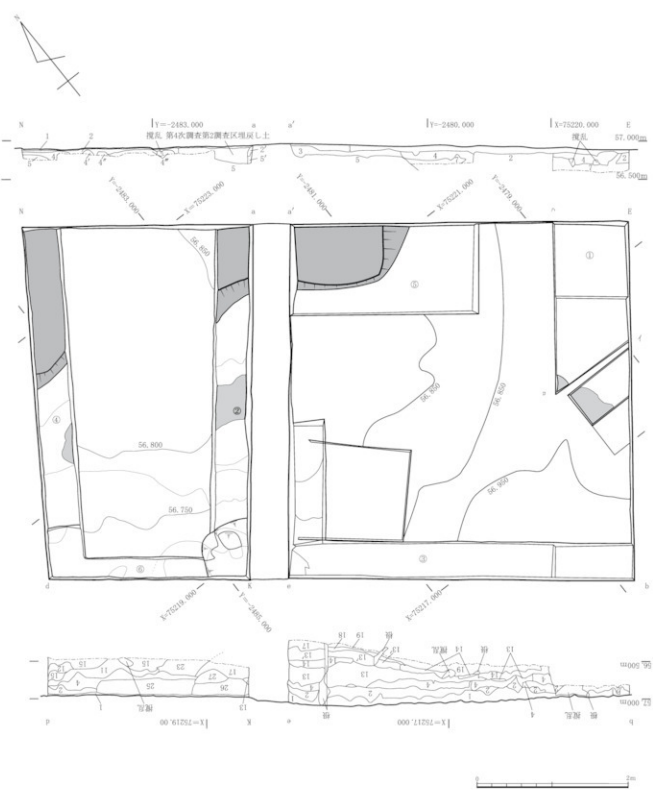
e－b・K－d断面の関係　表土（第1層）、表土下堆積土（第2層）、第4層の順で堆積する。

第11層と第15層はK－d断面では、第4層の下にある。この二層は、K点からd点方向へ1.2m地点で上面が中心部へ向かって急激に傾斜している。e－b断面では、第11層と第15層の上面をとらえることはできなかったが、e－a′断面では第16層と第17層の下に第15層の上面を確認した。

第23層はK－d断面では、第15層、第23層、第17層の順に積まれている関係が見られたが、第1－1調査区e－b・e－a′断面では第15層と第17層の間に第23層は確認できなかった。e－b断面の黒褐色粘質土第19層とK－d断面の黒褐色弱粘質土第23層は、直接的な層の繋がりは確認できなかったものの、同一の層である可能性が考えられる。

第13層はK－d断面では、第4層を分断するゴミ穴の撹乱によって、第4層と褐色粘質土（第13層）の関係を確認できなかったが、e－b断面では第4層下で検出した。K－d断面では中心部から外側へ向かって収束し、ごく狭い範囲で検出されたのに対し、e－b断面では、中心部に向かって下方向に広がっていたため、第13層が断面凸レンズ形であることが判明した。

e－a′・K－a断面の関係　表土（第1層）、表土下堆積土（第2・2′・2″・2‴・3層）、第4層の順で堆積している。第4層以下の層順から、墳頂部の構築状況が確認できた。墳頂外側から明黄褐色粘質土（第5層）が中心部に向かって傾斜していることから、第5層は土手状盛土と考えられる。第5層の上に、黒褐色粘質土（第7層）があり、この二層の関係は傾斜の方向から第7層が第5層の後に積みあげられたものと考えられる。同様に、中心部に向かって傾斜している第7層の上に第8層、第9層、第10層、第15層、第16層・第17層（第16層と第17層の層順は不明）、第13層が盛土されている様子が観察された。このため、墳頂部は、土手状盛土を造り、その内側に土を充填する方法で構築されたと考えられる。e－a′断面では、e



第９図　第１調査区平面図・断面図（縮尺1/50）

第１調査区平面図・断面図層名

［表土］　1　Hue10YR3/4暗褐色砂質土（第１調査区全体に認められる。以下、［表土］は省略する）

第１−１調査区

a′ −E 壁

［表土下堆積土］　2　Hue10YR3/4暗褐色弱粘質土
　3　Hue10YR3/4 暗褐色粘質土（10 ㎜以上の黄褐色土粒を10%含む）
［盛土］　4　Hue10YR4/4 褐色粘質土
　5　Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土（一部に 1〜2 ㎝の白色風化岩片を含む）
　7　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土（2〜5 ㎜の黄褐色土粒を 25%含む）

b−E 壁

［表土下堆積土］　2　Hue10YR3/4暗褐色弱粘質土
［盛土］　7　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土（2〜5 ㎜の黄褐色土粒を 25%含む）
　20　Hue10YR3/4 暗褐色粘質土（5〜10 ㎜の黄褐色土粒を 3%含む）

サブトレンチ① b−a′壁

［表土下堆積土］　2　Hue10YR3/4暗褐色弱粘質土
［盛土］　4　Hue10YR4/4 褐色粘質土
　7　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土（2〜5 ㎜の黄褐色土粒を 25%含む）
　20　Hue10YR3/4 暗褐色粘質土（5〜10 ㎜の黄褐色土粒を 3%含む）
　21　Hue10YR4/4 褐色粘質土（1〜2 ㎝の白色風化岩片を 3%含む）

サブトレンチ① b−a壁

［表土下堆積土］　2　Hue10YR3/4暗褐色弱粘質土
［盛土］　4　Hue10YR4/4 褐色粘質土
　7　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土（2〜5 ㎜の黄褐色土粒を 25%含む）
　21　Hue10YR4/4 褐色粘質土（1〜2 ㎝の白色風化岩片を 3%含む）

a−b 壁

［表土下堆積土］　2　Hue10YR3/4暗褐色弱粘質土
［盛土］　4　Hue10YR4/4 褐色粘質土
　13　Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土（一部に 1〜2 ㎝の白色風化岩片を含む）
　13′　Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土（一部に 1〜2 ㎝の白色風化岩片を含む）
　14　Hue10YR4/6 褐色粘質土
　17　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土
　18　Hue10YR3/4 にぶい赤褐色粘質土
　19　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土（2〜5 ㎜の黄褐色土粒を 3%含む）

a−a′ 壁

［表土下堆積土］　2　Hue10YR3/4暗褐色弱粘質土
　3　Hue10YR3/4暗褐色粘質土（10 ㎜以上の黄褐色土粒を 10%含む）
［盛土］　4　Hue10YR4/4 褐色粘質土
　4′　Hue10YR3/3 暗褐色粘質土
　5　Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土（一部に 1〜2 ㎝の白色風化岩片を含む）
　7　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土
　10　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土
　13　Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土（一部に 1〜2 ㎝の白色風化岩片を含む）
　13′　Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土（一部に 1〜2 ㎝の白色風化岩片を含む）
　14　Hue10YR4/6 褐色粘質土
　17　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土
［富山市豆トレンチ埋戻し土］24　Hue10YR3/4 暗褐色弱粘質土

第１−２調査区

d−N 壁

［表土下堆積土］　2　Hue10YR4/4 褐色粘質土
［盛土］　4　Hue10YR3/4暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックを 15%含む）
　5　Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土
　6　Hue10YR4/6 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを 25%含む）
　7　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土（黒色・明黄褐色土ブロックを 50%含む）
　8　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土（黒色・明黄褐色土ブロックを 50%含む。7 より黒色が強い）
　11　Hue10YR4/6 褐色粘質土（明黄褐色土ブロックを 15%含む）
　12　Hue10YR3/3 暗褐色粘質土（褐色の砂を 2%含む）
　15　Hue10YR4/4 褐色粘質土（明黄褐色土ブロックを 50%含む）
　22　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土

K−d 壁

［表土下堆積土］　2　Hue10YR4/4 褐色粘質土
［盛土］　4　Hue10YR3/4暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックを 15%含む）
　11　Hue10YR4/6 褐色粘質土（明黄褐色土ブロックを 15%含む）
　12　Hue10YR3/3 暗褐色粘質土（褐色の砂を 2%含む）
　13　Hue10YR4/4 褐色粘質土
　15　Hue10YR4/4 褐色粘質土（明黄褐色土ブロックを 50%含む）
　17　Hue10YR1.7/1 黒色弱粘質土
　23　Hue10YR3/2 黒褐色弱粘質土
［富山市豆トレンチ埋戻し土］25　Hue10YR3/3 暗褐色弱粘質土
［ゴミ穴の堆積し土］　26　Hue10YR2/2 黒褐色粘質土（1〜2 ㎜の黄褐色土粒を 3〜5%含む）
　27　Hue10YR5/8 黄褐色粘質土

K−a 壁

［表土下堆積土］　2　Hue10YR2/3 黒褐色弱粘質土（一部に黄褐色土ブロックを含む）
　2′　Hue10YR2/3 黒褐色弱粘質土
　2″　Hue10YR3/4 暗褐色弱粘質土
　2‴　Hue10YR3/4 暗褐色弱粘質土
　3　Hue10YR3/4暗褐色弱粘質土（1〜2 ㎜の明黄褐色土粒を 15%含む）
［盛土］　4　Hue10YR4/4 褐色粘質土
　4′　Hue10YR3/3 暗褐色粘質土（d−N 壁第 4 層と対応）
　5　Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土（1〜2 ㎜の白色風化岩片を 2%含む）
　5′　Hue10YR4/6 褐色粘質土
　7　Hue10YR2/2 黒褐色粘質土（黄褐色土ブロックを 5%含む）
　7′　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土（7 よりも褐色土の割合が多い）
　8　Hue10YR2/2 黒褐色粘質土（黄褐色土ブロックを 30%含む）
　8′　Hue10YR4/6 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを 2%含む）
　8″　Hue10YR3/4 暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックを 30%含む。第 1〜2 調査区平面第 8 層と対応）
　9　Hue10YR3/4暗褐色粘質土（10 ㎜未満の黄褐色土粒を 5%。1〜2 ㎜の白色風化岩片を 3%含む。平面では炭化物を多量に含む）
　10　Hue10YR2/2 黒褐色粘質土（1 ㎜以下の黄褐色土粒を 2%含む）
　13　Hue10YR4/4 褐色粘質土
　15　Hue10YR2/3 黒褐色弱粘質土（黄褐色土ブロックを 5%含む）
　15′　Hue10YR4/4 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを 30%含む）
　15″　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土（1〜2 ㎜の黄褐色土粒を 2%含む）
　16　Hue10YR3/4暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックを 3%含む）
　17　Hue10YR1.7/1 黒色粘質土
［ゴミ穴の堆積し土］　26　Hue10YR2/2 黒褐色粘質土（1〜2 ㎜の黄褐色土粒を 3〜5%含む）

a−N 壁

［表土下堆積土］　2　Hue10YR4/4 褐色弱粘質土
　2′　Hue10YR2/3 黒褐色弱粘質土（K−a 壁第 2 層と対応）
［盛土］　4　Hue10YR3/4暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックを 15%含む）
　4′　Hue10YR3/3 暗褐色粘質土
　4″　Hue10YR3/4 暗褐色弱粘質土
　4‴　Hue10YR2/3 黒褐色粘質土
　5　Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土
　5′　Hue10YR4/6 褐色粘質土

点で厚さ0.4mの第13・13′層が、a′点方向へ0.45m、標高56.690m地点で収束し、K－d断面ではK点で厚さ0.09mの第13層がd点方向へ0.08m、標高56.760m地点で収束する。

また、第15層は、e－a′断面ではe点からa′方向へ0.76m地点で中心部に向かって急激に傾斜し、K－a断面でもK点からa点方向へ0.56m地点で中心部へ向かって傾斜が始まる。第16層、第17層は、第15層が急激に落ち込んでいる部分を充填するように積まれ、さらにその上に第13層が積まれている。第17層の上面までは、中心部へ向かう落ち込みが確認できるが、第13層の上面は平坦であることから、第13層は、第15層上面の落ち込みを均すためのものであったと考えられる。

富山市旧トレンチ埋戻し土はe－a′壁で検出されたが、K－a壁ではe－a′壁における検出面に相当する位置では確認できなかったため、富山市旧トレンチの屈曲部が畔内に存在していることが想定された。しかし、今回K－a壁で富山市旧トレンチが検出されなかったのはゴミ穴による撹乱の影響を受けたためであると推測した。

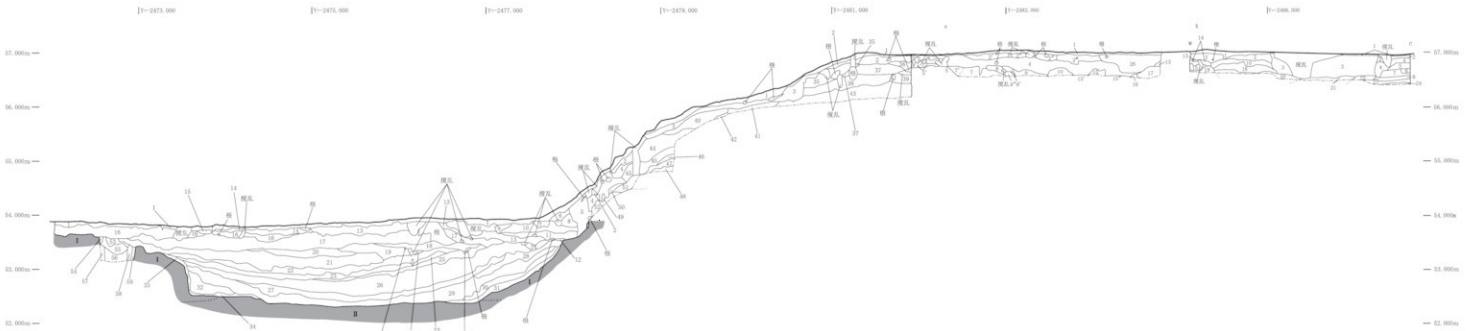
土手状盛土　第4次調査では、標高56.400m付近で地山起源と考えられる純度の高い黄褐色粘質土による山なりの土層（第4次調査第1調査区第20層）の上面とその内側に墳丘の中心方向に傾斜を持つ互層状の土層群（第4次調査第1調査区第14～19層）を確認した。第4次調査の段階で、第20層は「土手状盛土」と呼称されている盛土、第14～19層は土手状盛土内部に充填された盛土に相当する可能性が指摘された。

第4次調査第2調査区では、墳頂盛土として、墳頂部側に第35～51層を確認した。第4次調査の時点では、墳頂部の具体的な盛土状況が不明であったため、土手状盛土を明確に認めることはできなかった。

今回の調査では、第4次調査第2調査区と接続する形で調査区を設定し、墳頂部外側の盛土状況を確認した。第4次調査第2調査区第35・36・37層と第5次調査第1調査区K－a断面第5層がそれぞれ同質、同色の土で墳頂中心部と墳丘外側へ向かって傾斜している状況から、これらの層は、墳頂部外側に上面の幅1.85m規模で山なりの形状を持つ土手状盛土であると考えた（第10図）。以上、第4次調査と第5次調査により、墳頂部は土手状盛土を基本とし、その内側に盛土を積み重ねていく方法で構築されていることが明確になった。

なお、土色・土質内容の類似性から、第4次調査第2調査区第38・39・43層も土手状盛土を構成する層であると想定されるが、今回の調査は標高56.720mで掘削を止めたため、土手状盛土の規模とこれらの層が土手状盛土を構成する層であるかということについては明らかにすることが出来なかった。

サブトレンチ②から地山起源の風化岩片を含む明黄褐色粘質土（第5層）、サブトレンチ④から明黄褐色粘質土（第5層）・黄橙色土ブロックを含む褐色粘質土（第6層）を標高56.860mの地点で検出した。第1－2調査区で確認された第5・6層との繋がりを確認する目的で設定したサブトレンチ⑤では、標高56.820m地点で一部に風化岩片を含む明黄褐色粘質土（第5層）を検出した。中心部へ向かって傾斜する内部の土層との関係から検出された第5・6層は、土手状盛土と判断した。この土手状盛土はサブトレンチ④でN点からd点方向へ1.95m、サブトレンチ⑤で、a′点からe点方向へ0.75mの範囲で検出され、a′点からE点方向へ1.2mのところで途切れていため、コ字形をなす可能性が考えられる。



第10図　第４次調査第２調査区断面とＫ－ａ断面とｗ－ｃ断面の合成図（縮尺約1/70）

土手状盛土と考えられる第4次調査第1調査区第20層の上面の標高は56.400mであり、第5次調査第1調査区内で検出した土手状盛土上面の標高は、56.820～56.860mと約0.45mの標高差がある。第4次調査第1調査区第20層と第1調査区内の土手状盛土の関係は、今回の調査で明らかにすることはできなかったが、土手状盛土は2段以上の段を成すか、あるいは場所によって高低差をもって作られた可能性があると考えた。

風化岩片を含む褐色土層　第4次調査第1調査区西端では、墳頂中心部へ向かって傾斜する第14～19層とは傾斜角度が異なる第13層を上面の標高約56.730mで検出した。第13層は調査区の墳丘中心側で認められ、傾斜が急角度で第14層を掘り込んでいるようにも観察された。また、非常にしまりが強く周囲の土層とは異なる性質を持つことから墓壙に関係する土層の可能性が指摘された。

今回の調査では、サブトレンチ①内のロ点付近において、上面の標高約56.750m地点で、部分的に同質の風化岩片を含む褐色土（第21層）が厚さ約0.24mで検出された。また、第1－2調査区サブトレンチ②においても上面の標高56.700mの地点で風化岩片を含む暗褐色粘質土（第9層）を検出し、同質の層の可能性がある。さらに、サブトレンチ④では、平面でのみであるがしまりの強い暗褐色粘質土（第9層）を検出した。

風化岩片を含む層は、第9図に示したように平面で見ると、ロ隅から0.22m、サブトレンチ②ではa点からK点方向へ0.2～0.26m、サブトレンチ④ではd点からN点方向へ1.5～2.04mの範囲で検出され、土手状盛土の内側で長楕円形の広がりを示すことが確認された。

墳頂部の層序　墳頂外側から中心部へ向かう土層を断面で確認すると、外側から土を積みあげていると考えられる。墳頂部の最も外側に位置する明黄褐色の土手状盛土（第5層）から内側へ向かって順に、黒褐色粘質土（第7層）、黄褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土（第8層）、暗褐色粘質土（第9層）、暗褐色粘質土（第10層）、黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第15層）が盛土されている。

K－a断面において、第5層と第13層の明黄褐色粘質土は間層を持つことから盛土された順序が異なることが確認された。加えて、b－d間の断面を見ると第13層は、K点付近で途切れ、e－a′断面とK－a断面では墳頂外側へ向かってそれぞれ0.45m、0.12m地点で収束しているため、第13層が残っている範囲は墳頂部の南側に限定される。

e点の第13′層底面の標高は56.360m、K点では56.730mであり、標高差は0.36mである。またe－a′断面ではa′点方向へ0.45mの地点にあるの第13層の収束点の標高は56.690mであり、K－a断面ではa点方向へ0.08mの地点にある収束点の標高は56.740mである。これらの地点を結ぶと、第13層は中心部へ向かって落ち込む断面凸レンズ形を呈し、第1調査区内では中心部付近で存在し、南西方向に広がっていると考えられる。また、e－b断面において、第13層以下の層が墳丘中心部に向かって落ち込んでいるため、埋葬施設が存在する可能性がある。

第2－2調査区第10・17層出土遺物との関係　第1－2調査区で検出した明黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第11・15層）は、富山市教育委員会1974で標示石(?)とも思われる礫や土器を検出した地山土や黒色土の斑文をもつ盛土面に相当すると考え、標高56.780mで第4層との平面的な境を検出した。第2－2調査区で出土した礫の底部や土器片の標高は56.700mであり、K－d断面における第11層の上面の標高は56.740mであった。このことから、第1－2

調査区第11・15層と、礫や土器片を検出した第2−2調査区の第17層は同一の層であると考えられる。また、第2−2調査区第10・17層の標高56.690〜56.710mで出土した遺物が墳頂部で行った祭祀に関係するものであった場合、第1−2調査区第11・15層は祭祀を行った際の墳頂上面と推定される。第11層と第15層が落ち込む部分は第13層で上面が均され、さらにその上から第4層が盛土されている。第4層は、現在残っている部分で最大の厚さが0.26mあり、土器祭祀を行った後、それらの土器を覆うように墳頂部に盛られた盛土であったと考えられる。

さらに、今回の調査で確認した最も深いところに存在する層は第15層であり、第11層と第15層の中心部付近での急激な傾斜は、墳頂中心部に存在すると推測した埋葬施設の影響である可能性がある。第11層と第15層は、土器祭祀を行ったと考えられる面であると同時に、墳丘中心部に存在する埋葬施設とも関係のある層である。

(5) 遺物の出土状況

第1調査区内からは、62点の遺物が出土した。内訳は、土器片60点、陶器片1点、磁器片1点である。また、同調査区外の表土からは土器片または土製品と思われるものを1点採集している。このうち、富山市旧トレンチ内からは土器片15点が出土した。土器片については、弥生土器または土師器と考えられる。なお、出土遺物は全てが小片であったため、詳細を確認できるものはなかった。

第1−1調査区内では、土器片20点、陶器片1点、磁器片1点が出土した。分布状況については、墳頂外側（a′点及びE点周辺）に出土地点が集中している。また、出土層位によれば、表土から陶器・磁器片を含む9点、表土下堆積土から5点、盛土から8点が出土した。なお、同調査区内では、表土出土（e−a′壁から4.548m、e−b壁から3.478m、標高56.835m）の土器片と表土下堆積土出土（e−a′壁から4.051m、e−b壁から3.544m、標高56.797m）の土器片の合計2点が接合した。

第1−2調査区内では、土器片40点が出土した。分布状況については、墳頂内側（第1−2調査区内南西側半分）に出土地点が集中している。また、出土層位によれば、表土から37点、表土下堆積土から1点、盛土から2点が出土した。なお、同調査区内では、表土出土（K−a壁から1.2m、K−d壁から0.314m、標高56.883m・K−a壁から1.587m、K−d壁から1.638m、標高56.931m）の土器片2点が接合した。その他、同調査区内表土出土（K−a壁から0.529m、K−d壁から2.581m、標高56.938m）の土器片及び第2−2調査区富山市旧トレンチ内出土（w−c壁から2.35m、w−d′壁から1.23m、標高56.726m）の土器片の合計2点が接合した（第16図−4）。

（蒲生侑佳・清水秀直・二口頌之）

(6) 過去の調査（第2調査区側）

富山市トレンチ　第2−1調査区では、c′点付近で富山市旧トレンチの南部の検出を予想した。第2−2調査区では、富山市旧トレンチの西部と、南東中央部にある屈曲部の検出を予想した。富山市旧トレンチの西角は、存在すると思われる付近に樹木があるため、検出できないものと予想した。

富山市教育委員会1974の報告書では、0.2m程の表土を除去すると、地山土や黒色土の斑文

をもつ盛土が検出されたこと、トレンチの中央部においては、土壙とみられる 260cm×130cm の長楕円形の他に比べてやや黒ずんだ土色の範囲が確認されたこと、またその範囲内で「25cm 大の標示石（?）とも思われる礫」が検出されたことが記されている。第2−2 調査区では、このような特徴をもつ墳丘盛土や、長楕円形状のやや黒ずんだ土色の範囲、また大形の礫が検出されることを想定した。（佐藤巧庸・泉田侑希）

（7）第2調査区の調査成果（第11〜15図）

第2調査区の調査地の現況　調査地は墳頂南西部である。調査区配置図（第6図）を見ると、墳頂中央部と第2−2調査区内において標高57.000mの等高線が乱れていることが確認できる。等高線が乱れている場所である墳頂中央部と、W点からd′点方向へ約2mの地点には樹木が存在し、墳頂部の平坦な場所に比べて約0.08m高まっている。

墳頂外表の標高は、第2−1調査区南隅（S点）で56.937m、西隅（c′点）で56.937m、北隅（s点）で57.113m、東隅（b′点）で56.939mである。s点側、つまり墳頂中央部に直径0.6mの樹木が存在し、そこへ向かって標高が0.02m高まっている。第2−2調査区は墳頂西部であり、南東側に向かって約0.15m高まる。逆に、墳頂中央部からW点に向かっては約0.14m低くなっている。墳頂外表の標高は、調査区北隅（d′点）で56.954m、東隅（w点）で57.018m、南隅（c点）で56.944m、西隅（W点）で56.867mである。

基本層序　調査区の基本層序は、大きく以下のとおりである。

表土：暗褐色を示す砂質土（第1層）である。厚さ0.02〜0.12mで堆積する。

表土下堆積土：褐色、暗褐色、黒褐色を示す弱粘質土または粘質土（第2層）である。表土よりもしまりが強い。第2−1調査区では部分的に第3〜7層も見られる。

第2−1調査区では9層以下は盛土である。第2−2調査区では4層以下は盛土である。

第2−1調査区の発掘経過　表土（第1層）を約0.06m掘り下げた地点で、平面において表土下堆積土（第2・3層）と極暗褐色土（第8層）を検出した。調査区全体にわたって暗褐色弱粘質土（第2層）が認められたほか、b′点付近では暗褐色粘質土（第3層）を確認した。第8層は第2・3層としまりが異なり、富山市教育委員会1974による発掘調査トレンチと重なる位置にあるため、富山市旧トレンチ埋戻し土と推定した。

c′点からs点方向へ0.5〜2.42mの範囲にある富山市教育委員会旧トレンチ埋戻し土と推定した第8層を確認するために、s−c′壁から東へ幅0.3m、長さ1.9mのサブトレンチ①を設定した。第8層が富山市旧トレンチ埋戻し土であることを確認した後に、富山市教育委員会1974に記載されたトレンチの規模に該当する範囲までサブトレンチ①を拡張した。

また、調査の過程で、第2−2調査区において検出された土手状盛土の広がりを確認するために、サブトレンチ①のへ−ト壁にあらわれ、c′点付近に続く褐色粘質土（第25層）を掘り下げた。

次に、墳丘盛土の状況を確認するために、s−b′壁沿いに幅0.5m、長さ1.3mのサブトレンチ④を設定した。そして、最上位の盛土と考えられる黄褐色粘質土（第9層）を検出した後に、第2−1調査区全体を第9層の上面にそろえた。

調査の過程で、第2−2調査区の墳頂中央部において黒褐色粘質土（第19層）が検出され、

土壙の可能性が浮上した。この土層の広がりを確認する目的で、第2－1調査区のｓ点からニ点までの範囲に、幅0.5mでサブトレンチ⑥を設定した。

調査区東部では、サブトレンチ④を掘り下げたところ、b′点付近において黒褐色粘質土（第10層）が検出されたため、第10層の厚さと性格を確認する目的で、b′点に0.5m四方のサブトレンチ⑦を設定した。

サブトレンチ①　富山市教育委員会旧トレンチの埋戻し土を掘り上げた後、ニ－ホ壁、ホ－ヘ壁、ヘ－ト壁において盛土の層序関係を確認した。第6層は表土下堆積土、第9・9a～c・16・23～26・27a～c・28・29層は盛土である。

ニ－ホ壁では暗褐色粘質土（第6層）の下に暗褐色粘質土（第16層）があり、両層の間に褐色粘質土（第28層）が、最大0.3mの厚さで上面を水平に積んでいる。

ホ－ヘ壁では第6層の下に、暗褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第26層）が上面をほぼ水平にして積まれている。また、第6層の下においては、黄褐色粘質土（第9a・9b・9c層）と暗褐色粘質土（第27a・27b・27c層）が墳頂中央部へ向かって緩やかに傾斜し、第9c・27c・9b・27b・9a・27a層の順に積まれている。これらの層の下には、第9a層の下に褐色粘質土（第28層）が、第27c層と第9c層の間に黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第29層）がある。第9c層の下には黄褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土（第16層）と風化岩片を含む褐色粘質土（第23層）がある。これらの層も緩やかに傾斜している。第23層の下には黄色土ブロックと礫を含む黒褐色粘質土（第24層）が存在する。

サブトレンチ①の底面においては第16・23・24・29層を確認した。これらの層序関係は、断面と対比させると、墳頂部外側から第24・23・16・29層の順に積まれていることが明らかである。

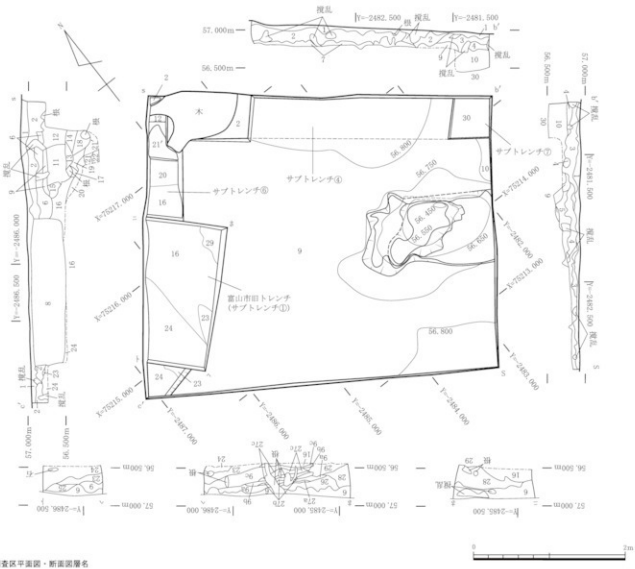
ホ－ヘ壁における盛土の層序関係をあらためて整理すると、下から順に第24層、23層、16層を積んだ後に、第9層そして第27層のそれぞれ土質が類似する土層群を墳頂外縁部から中央部へ向かって交互に積んでいるものと判断できる。また、その過程では、第9層と第27層の土層群の北東側端部に第29層や第28層のような盛土が施されていることが分かる。そして、最上部には、第9a層と第28層に揃えて第26層が充填されている。

ヘ－ト壁では、第6層の下に黄褐色粘質土（第9層、厚さ0.15m）と黄色土ブロックを含む褐色粘質土（第25層、厚さ0.1m）がある。その下には、風化岩片を含む褐色粘質土（第23層）が厚さ0.1mで上面が水平に積まれる。さらに下には、黄色土ブロックと礫を含む黒褐色粘質土（第24層）が、c′点方向から墳丘内側へと傾斜するように積まれている。

サブトレンチ⑥　第2・6層が表土下堆積土、第9・11～24層が盛土である。

暗褐色粘質土（第2層）の下に、しまりの強い暗褐色粘質土（第6層）が堆積する。その下層に盛土の黄褐色粘質土（第9層）がある。第9層の下には風化岩片を含む明黄褐色土（第11層）、黄褐色粘質土（第12層）、黄褐色土粒を含む暗褐色弱粘質土（第15層）が認められる。第11・12層は厚さ0.3mである。第11・12・15層の上面はほぼ水平に揃っている。

第11・12層の下層には、褐色粘質土（第13層）と黄褐色粘質土（第14層）がある。第14層はｓ点側、つまり墳頂中央部側へ向かって若干傾斜する様相が見られる。これらの層の下には、根の下部のみの範囲に褐色砂質土（第17層）、そして黒色土ブロックを含む明黄褐色弱粘



第2－1調査区平面図・断面図層名

s－b′壁

[表土]	1	Hue10YR3/4	暗褐色砂質土
[表土下堆積土]	2	Hue10YR3/3	暗褐色斑粘質土
	3	Hue10YR3/4	暗褐色粘質土
	4	Hue7.5YR3/4	暗褐色粘質土
	7	Hue10YR4/6	褐色粘質土
[盛土]	9	Hue10YR5/6	黄褐色粘質土
	10	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土
	30	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土　(明黄褐色土ブロックを10%含む) (黒色土ブロックを3%含む)

b′－S壁

[表土]	1	Hue10YR3/4	暗褐色砂質土
[表土下堆積土]	3	Hue10YR3/4	暗褐色粘質土
	4	Hue7.5YR3/4	暗褐色粘質土
	5	Hue7.5YR4/4	褐色粘質土
[盛土]	9	Hue10YR5/6	黄褐色粘質土
	10	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土
	30	Hue10YR2/3	黒褐色粘質土　(明黄褐色土ブロックを10%含む) (黒色土ブロックを3%含む)

s－c′壁

[表土]	1	Hue10YR3/4	暗褐色砂質土
[表土下堆積土]	2	Hue10YR3/3	暗褐色斑粘質土
	6	Hue10YR3/3	暗褐色粘質土
[富山市旧トレンチ埋戻し土]	8	Hue7.5YR2/3	極暗褐色土
[盛土]	9	Hue10YR5/6	黄褐色粘質土
	11	Hue10YR6/8	明黄褐色土　(1～2mmの風化岩片を3%含む)
	12	Hue10YR5/6	黄褐色粘質土
	13	Hue10YR4/6	褐色粘質土
	14	Hue10YR5/6	黄褐色粘質土　(1mm以下の風化岩片を1%含む)
	15	Hue10YR3/4	暗褐色斑粘質土　(1mm程度の黄褐色土粒を1%含む)
	16	Hue10YR2/3	暗褐色粘質土　(5～10mmの黄褐色土ブロックを25%含む)
	17	Hue10YR4/6	褐色粘質土
	18	Hue10YR6/6	明黄褐色斑粘質土(30mmの黒色土ブロックを10%含む)
	19	Hue10YR6/6	明黄褐色土　(一部に1～2mm程度の風化岩片を1%含む)
	20	Hue10YR2/1	黒色斑粘質土　(褐色土ブロックを5%含む)
	21	Hue10YR5/6	黄褐色粘質土　(風化岩片を1%含む)
	21′	Hue10YR5/6	黄褐色粘質土
	22	Hue10YR2/1	黒色斑粘質土　(5mm以下の褐色土ブロックを5%含む)
	23	Hue10YR4/6	褐色粘質土　(1～2mmの風化岩片を1%含む)
	24	Hue10YR4/3	黒褐色粘質土　(5～10mmの黄色土ブロックを10%、礫を含む)

富山市教育委員会旧トレンチ断面(サブトレンチ①)

[表土下堆積土]	6	Hue10YR3/3	暗褐色粘質土
[盛土]	9	Hue10YR5/6	黄褐色粘質土
	16	Hue10YR2/3	暗褐色粘質土　(5～10mm黄褐色土ブロックを25%含む)
	23	Hue10YR4/6	褐色粘質土　(1～2mmの風化岩片を1%含む)
	24	Hue10YR4/3	黒褐色粘質土　(5～10mmの黄色土ブロックを15%、礫を含む)
	25	Hue10YR4/4	褐色粘質土　(5～10mmの黄色土ブロックを15%含む)
	26	Hue10YR4/5	褐色粘質土　(暗褐色土砂state ブロックを7%含む)
	27	Hue10YR3/4	暗褐色粘質土　(5～10mmの黄褐色土ブロックを15%含む) (黒褐色土ブロックを30%含む)
	28	Hue10YR4/6	褐色粘質土
	29	Hue10YR4/4	褐色粘質土　(黄褐色ブロックを7%含む)

第11図　第２－１調査区平面図・断面図（縮尺1/50）

質土（第18層）、一部に風化岩片を含む明黄褐色土（第19層）が認められる。第18層の底面には根の影響が見られ、また墳頂中央部には大きな樹木があり、これ以上発掘することができなかったが、第14層と同じく墳頂中央部側へ向かって傾斜する様相がうかがわれる。そして、第18・19層の下には、黄褐色粘質土（第21′層）が認められた。

第6・11・15層の下には、黄褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土（第16層）がある。第16層は0.05～0.17mの厚さで堆積し、墳頂中央部側へ向かって急激に下降している。この下層には褐色土ブロックを含む黒色弱粘質土（第20層）が最大0.1mの厚さで堆積する。第16と同じく墳頂中央部へと向かって急激に傾斜している。さらに下層には、風化岩片を含む黄褐色粘質土（第21層）と褐色土ブロックを含む黒色弱粘質土（第22層）が、第20層の傾斜面に揃って認められる。第21層は第21′層と土質が類似するが、風化岩片をわずかながらも含む点で分けられる。第13層以下は、全体的に墳頂中央部側へと向かって下降する様相が見られるが、それは第16層や第20層などの土層の傾斜に起因するものと考えられる。

なお、サブトレンチ⑥においては、現地表面から約0.5～1.0m掘り下げた底面で第16・20・21′層を検出した。第22層はサブトレンチ⑥底面の高さで途切れているようである。第22層の下面には第21′層が入り込む様相がうかがわれたが、時間的制約もあり、これ以上サブトレンチを広げて深く調査することはできず、確実に判断するには至らなかった。

サブトレンチ①をはさんでc′点周辺では、表土下堆積土である暗褐色粘質土（第2層）の下に、風化岩片を含む褐色粘質土（第23層）と黄色土ブロックと礫を含む黒褐色粘質土（第24層）が認められた。両層ともに、サブトレンチ①の箇所で説明したものと同一の盛土である。第23層はs－c′壁においてわずかに見られるだけであるが、サブトレンチ①のA－A′壁やA－B′壁では、墳丘中央部側へ向かって傾斜していく様子が観察できる。第24層はc′点からやはり墳丘中央部側へ向かって傾斜している。

サブトレンチ④　第2～4・7層は表土下堆積土、第5層は落ち込みに存在する堆積土、第9・10層は盛土である。

s－b′壁では暗褐色弱粘質土（第2層）の隣で、b′点からs点方向へ0.7mの範囲で暗褐色粘質土（第3層）を厚さ0.08mで検出した。第3層の下には暗褐色粘質土（第4層）がある。また、第2層の下に褐色粘質土（第7層）がある。b′点からs点方向へ0.94mの地点では、第7層の下において黄褐色粘質土（第9層）を検出した。また、第4層の下では、黒褐色粘質土（第10層）を厚さ0.16mで検出した。

b′－S壁では、暗褐色粘質土（第3・4層）を確認した。第3層はb′点からS点方向へ1.5m地点と2.2～2.6m地点において、最大0.17mの厚さで堆積している。第4層は0.04～0.1mの厚さで、しまりが強い。第4層の下には、b′点からS点方向へ1.16～2.08mの範囲で褐色粘質土（第5層）がある。そして、第5層の下において黄褐色粘質土（第9層）を検出した。

サブトレンチ④では、黄褐色粘質土（第9層）を底面全体において検出した。その後、第2－1調査区全体を平面的に精査したところ、この層が調査区の南側へ全体的に拡がっていることを確認した。しかし、サブトレンチ⑦の箇所、つまりb′点周辺では第9層が認められなかった。第9層は、第1調査区で検出した第13層と土色や土質が類似し、それとともに土層上面の標高はそれぞれ同じ56.860mであった。そのため、第9層と第1調査区第13層は同じ性格

の土層と言える。また、第2−1調査区s− c′壁の第11・12層とも土色や土質が類似しており、同じ性格の土層と考えることができる。

落ち込み b′−S壁を調査している過程で確認し、平面的に精査したところ検出した。長さ約1.65m、幅約1m、深さ0.3mの不定形を呈する。埋土は褐色粘質土（第5層）である。中央部から北西側がやや深くなっており、そこを中心に根跡と考えられるような落ち込みが放射状に認められることから、後世に育った樹木が倒木後、土が堆積して形成されたものと考えられる。

サブトレンチ⑦ 第10・30層は盛土である。第10層はb′点周辺において、第3層と第4層の下から検出された。平面で確認後、サブトレンチ⑦を設定し、厚さが0.3mであることを確認した。第10層はb′−S壁において、b′点からS点方向へ1.08mの範囲に認められた。第10層の下では、明黄褐色土ブロックと黒色ブロックを含む黒褐色粘質土（第30層）を確認した。

第2−2調査区の発掘経過 表土（第1層）を約0.02m掘り下げた地点で、表土下堆積土（第2層）と富山市旧トレンチ埋戻し土（第3層）、また富山市旧トレンチの一部を検出した。

富山市旧トレンチについては、当初において調査区東側では直角に屈曲するラインが、また南側から西側にかけては直線的なラインを検出したが、北側では正確な位置を把握することができなかった。そこで、富山市旧トレンチの範囲や深さを確定する目的で、w−c壁沿いに幅0.3mのサブトレンチ②を、またw−d′壁沿いに同じく幅0.3mのサブトレンチ③を設定した。その結果、サブトレンチ③では、富山市旧トレンチ埋戻し土よりもしまりの強い土層を下層において確認した。また、第2層と富山市旧トレンチ埋戻し土の境界を確認することができた。同様に、サブトレンチ②でも富山市旧トレンチ埋戻し土の掘り下げを行い、底面の確認を行った。

次に、w−d′壁の箇所では、黒褐色粘質土（第17層）を精査する過程で、w点付近において黒褐色粘質土（第19層）を検出した。この土層の範囲を確認する目的で、w点までサブトレンチ③を拡張した。並行して、w点とサブトレンチ②との間に残された、富山市旧トレンチでは未掘の部分も調査区平面の深さに合わせて掘り下げた。また、これらの作業と並行して、富山市旧トレンチ内の埋戻し土も全体的に掘り下げたところ、富山市教育委員会1974の報告書で標示石と記述された直径25cm大の礫を検出したことから、富山市旧トレンチの底面を確認することができた。その後、サブトレンチ②と③における土層や標示石、また後述するような他の礫の位置などを参考にして、富山市旧トレンチの深さと考えられる深度まで掘り下げた。

調査区北側では平面に加えて、d′−W壁の精査を行ったが、根による撹乱の影響などもあり、富山市旧トレンチは検出できなかった。そこで、w−d′壁における第2層と第3層の境界地点と、d′−W壁において第3層が途切れる地点の付近に富山市旧トレンチの立ち上がりが存在するものと想定し、両地点を点線で結ぶことで、富山市旧トレンチ北側のラインを推定した。

富山市教育委員会の調査では、25cm大の標示石とされる礫を中心にして、土壙とみられる260cm×130cmの長楕円形の他に比べてやや黒ずんだ土色の範囲が確認されていた。今回の調査では、第17層がこれにあたるものであることを確認し、土壙の可能性を追究して平面的な精査を繰り返し行った。また、周囲に範囲を広げて、他の土層についても同じく土壙の可能性を平面的に追究するとともに、墳頂部上部における盛土の状況を平面と断面で把握することとした。

調査区南部では、暗褐色土（第4層）を掘り下げたところ、標高56.740～56.800mの地点において風化岩片を含む褐色土（第5層）を検出した。第5層は、第1調査区で見つかった土手状盛土と土色がよく類似しているため、関連性を明らかにする目的で、土手状盛土部分に d′－W壁に沿って幅0.4mのサブトレンチ⑤を、さらに第5層以下の層序を確認する目的でw－c壁沿いに幅0.5mのサブトレンチ⑧を設定した。

富山市教育委員会旧トレンチ　表土の下において、表土下堆積土の第2層とは土質が異なる極暗褐色土（第3層）を、w点からc点方向へ1.5～3.5m、w点からd′点方向へ0.15～2.12mの範囲で検出した。また、d′－W壁においては根による撹乱があったが、d′点からW点方向へ2.36～3.14mの範囲で第3層を検出した。この層が検出された範囲は富山市旧トレンチが想定される位置であり、またw－c壁、w－d′壁、d′－W壁のそれぞれの断面において、第3層と隣り合う土層の境界線が垂直またはそれに近くに立ち上がることから、第3層は富山市旧トレンチ埋戻し土と判断した。

富山市旧トレンチについては、w点からc点方向へ1.57mの地点で確認し、さらにw－c壁から北側へ0.38mの地点で直角に屈曲するラインを検出した。そして、このラインは、w点からd′点方向へ0.15mの地点へつながる。これらの結果、第2－1調査区で検出された富山市旧トレンチが第2－2調査区へ向かって伸び、そして直角に屈曲して第1－2調査区側へと続いていくことを確認した。さらにまた、w点からc点方向へ3.5mの地点と、d′点からW点方向へ3.15mの地点の間において、富山市旧トレンチの南側から西部にかけての直線的なラインを検出した。このラインは第2－1調査区で検出した富山市旧トレンチと位置的に合致しており、富山市旧トレンチが両調査区にまたがってつながることを確認した。

第3層を掘り下げていく過程では、富山市教育委員会1974の報告書で標示石と記述された直径25㎝大の礫（以下、礫1などと記す）をw－d′壁付近で検出し、さらにまたd′－W壁付近から礫2、w－c壁付近から礫3（小礫2点）を検出した。礫1～3は富山市教育委員会1974に掲載された墳頂部の写真（富山市教育委員会1974の図版15上）にも写るものであり、礫1が南側へ傾くという変化が見られるものの、各礫の位置関係などから富山市の調査後もほぼ動かされていないと判断した。そして、このことによって富山市旧トレンチの範囲と深さをある程度判断することができた。第3層を取り除いた時点での各礫の標高は、礫1で56.775m、礫2で56.727m、礫3で56.691mであり、これらの示す値が富山市旧トレンチの底面の標高と考えることができた。富山市旧トレンチの底面は、調査区南半部へ向かうほど若干深くなっているようである。断面図で見ていくと、富山市旧トレンチの底面（第3層底面）は、w－d′壁では表土の下から約0.15mにあるのに対し、w－c壁では表土の下から約0.35～0.4mにあることになっている。これは、d′－W壁では富山市旧トレンチの底面が表土の下から約0.2mにあることと比べてみても、低い値である。礫3の標高とw－c壁第3層底面のそれとを比べてみると、前者が先述のように56.691mであるのに対し、後者は56.500～56.600mで、0.091～0.191mの差が生じている。このことからw－c壁において富山市旧トレンチの底面は、断面図に表した第3層底面の高さよりも、実際には0.1～0.2m程度上に存在するものと考えられる。

富山市旧トレンチの北側は根による撹乱の影響などもあり、第2－2調査区内においては平面的に検出することが難しかったが、断面において一部を確認することができた。すなわち、w

点からd′点方向へ2.12mの地点で、第2層と第3層の境界線が垂直に近くに立ち上がることを確認した。また、これが第1−2調査区K−d壁第25層の様相ともほぼ揃うことを確認した。第3層は、d′−W壁においては先述のようにd′点からW点方向へ2.36〜3.14mの範囲に認められるが、根による撹乱をはさんで北東側には存在しない。このことから、根による撹乱の箇所に富山市旧トレンチの立ち上がりが本来あったものと想定した(d′点からW点方向へ約2.1m付近)。この地点とw−d′壁における確認地点とを点線で結ぶと、礫2の約0.17m北側にラインが通る。これは、富山市教育委員会1974に掲載された墳頂部の写真における礫2と富山市旧トレンチとの位置関係ともほぼ合致するものである。この点線の延長線と、富山市旧トレンチの南側から西部にかけての直線ラインの延長線の交点、つまり富山市旧トレンチの西角は、第2−2調査区から約0.25m外側に存在するものと推定した。

検出礫と出土土器、土壙と推定された長楕円形の範囲　礫1は黒褐色粘質土(第17層)に下半部が埋もれた状態であった。上面が南側へ傾き、北端がやや高く突き出た形で横置きにされていた。礫1北端部分の標高は56.775mである。富山市調査時の墳頂部の写真(富山市教育委員会1974の図版15上)では、礫の上面がわずかに南東側へ傾くものの、比較的平らな状態で写って見えることから、今回の調査までに原位置は変わらずに、礫の傾きが若干すすんだ可能性も考えられる。礫1は長さ28.4cm、幅19cmである。礫2や礫3、また周囲の地山の中に見られる礫と比べてみても、かなり大形である。礫の表面には石目であろうか、襞状の細かな筋が数多く見られた。

礫2は明黄褐色土ブロックを3%含む暗褐色土(第11層)の上面に、割れた小口面を下にした状態で置かれていた。最も高い部分の標高は56.805mである。礫2は、もと楕円形の礫が半分に割れたものであり、長さ16cm、幅7cmを測る。

礫3は実際には2点の小礫であり、一端が重なった状態で置かれていた。最も高い部分の標高は56.754mである。2点とも長さ8cm、幅6cm程で、楕円形と不整形を呈する。

第17層に埋没した礫1の下半部を検出するため周辺をわずかに掘り下げると、標高56.770mの地点で、礫の東側に接して台付壺と考えられる土器の口縁部から頸部にかけての破片が出土した(第12図下及び第15図)。富山市教育委員会1974には、この土器の検出記録が見られないことから、この深さまではトレンチが入れられていないものとあらためて判断することができた。

富山市教育委員会1974では、標示石とされる礫1を中心にして260cm×130cmの長楕円形の範囲に、他に比べてやや黒ずんだ土が堆積し、これが「土壙ともみれる」と推定されている。今回の調査において礫1の周辺を精査したところ、黒褐色粘質土(第17層)が検出され、w−d′壁へと帯状に伸びていくことから、この土層が富山市教育委員会の調査において検出された、他に比べてやや黒ずんだ土にあたるものと判断した。一方で、土壙の可能性を追究して礫1よりも南東側を繰り返し精査したが、第17層が富山市教育委員会1974において指摘された範囲で収束することはなく、調査区南西部へむかって帯状に伸びていくことが明らかとなった(第12図下)。そのため、第17層は土壙の可能性は低く、今回の調査では盛土層の一つであると判断した。

サブトレンチ③　第2層は表土下堆積土、第3層は富山市旧トレンチ埋戻し土、第10・14～16・19層は盛土である。

w－d′壁では、w点側において第2層の下に暗褐色粘質土（第14層）と褐色粘質土（第15層）を確認した。第14層の厚さは約0.1m、第15層の厚さは約0.05mである。この両層はw－c壁でも確認されている。また、層序や標高からみると、第2－1調査区s－c′壁の第9層と対応する位置関係にある。

d′点側においては、第2層の下に褐色土粒を含む黒褐色粘質土（第10層）が認められ、褐色土粒を含む黒褐色粘質土（第16層）の下に入り込む。第16層はw点からd′点方向へ1.6～2.3mの間に堆積する土層で、サブトレンチ③にのみ認められた。第16層は黒褐色粘質土（第17層）の下に入り込む。w点からd′点方向へ0.8～1.6mの間には第17層が認められ、これを追って南西側へ精査すると、礫1を越えて帯状に続く様相が見られた。このことから、第17層は、富山市教育委員会の調査で検出された、礫1を中心に260cm×130cmの長楕円形に広がる、他に比べてやや黒ずんだ土色の範囲にあたる土層と判断した。第17層よりw点側では黒褐色粘質土（第19層）が認められた。第17層と第19層の間には根の撹乱が見られるが、狭い範囲のもので、両層の境界線は垂直ぎみに立ち上がるものと考えられる。

サブトレンチ③の底面においては、第10・12・16・17・19層が認められた。第12層はd′－W壁でも認められる黒褐色粘質土で、第10層の下に堆積する土層である。w－d′壁の調査によって、墳頂中央部へ向かって第10層、第16層、第17層の順に盛土されていることが明らかになった。今回の調査では平面的な把握を重視し、サブトレンチ③の掘削を標高56.592～56.627mの地点で止めているため、第17層と第12層、第19層との層位関係は明確でない。

（佐藤巧庸・泉田侑希・高橋浩二）

d′－W壁の層序とw－d′壁との関係　d′－W壁の第2層は表土下堆積土、第3層は富山市旧トレンチ埋戻し土、第4・5層と第9～12層は盛土である。なお、d′－W壁のうち、南西部に認められた第4・5層はサブトレンチ⑤の項で説明する。

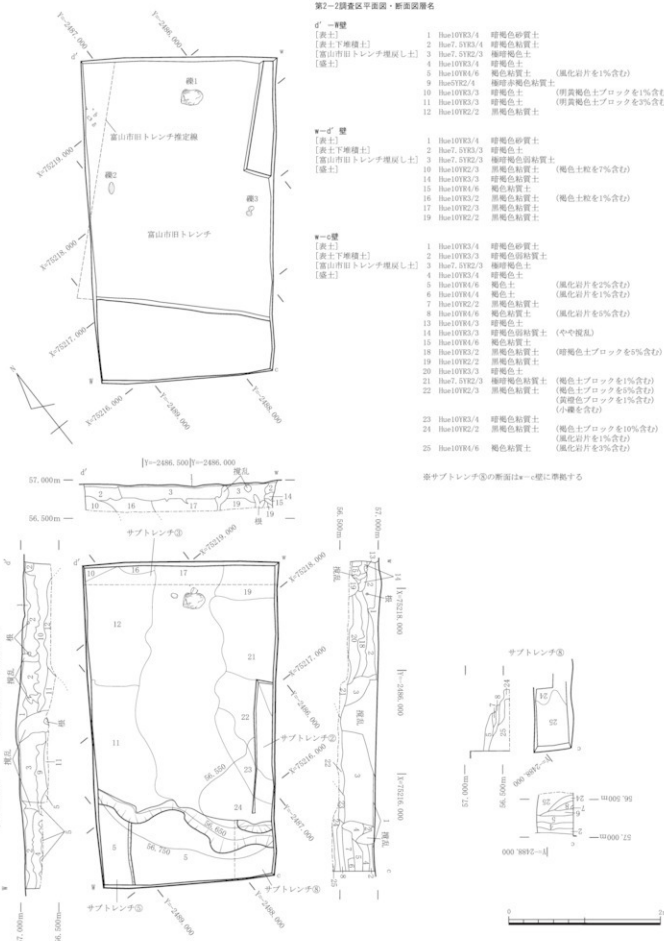
d′点からW点方向へ約2.3mと約3.2mの所にある撹乱の間に第3層が見られる。この第3層の下に極暗赤褐色粘質土（第9層）が約0.1mの厚さで認められる。第9層は土手状盛土の上部を形成する第5層の内側に充填された盛土である。

d′点の箇所から、W点方向へ約2.3mにある撹乱の間には、第2層の下に明黄褐色土ブロックを1%含む暗褐色土（第10層）が0.2～0.3mの厚さで認められる。第10層からは、第9節で述べるように、高杯脚部と高杯口縁部などの破片がまとまって出土している（第14図）。この第10層はw－d′壁でも認められる土層である。第9層から第10層にかけては、その下層に明黄褐色土ブロックを3%含む暗褐色土（第11層）が認められる。また、第10層と第11層の下へ入り込むように黒褐色粘質土（第12層）が認められた。

第12層はサブトレンチ③の底面へと続き、平面において第10・16・17層と接する。ただし、w－d′壁の調査深度においては、この第12層が確認できなかったため、第16層や第17層との層位関係は不明である。上述のように、第12層が第10層の下に位置することは確認した。

サブトレンチ⑤　第2層は表土下堆積土、第4・5層は盛土である。

d′－W壁側においては、風化岩片を含む褐色粘質土（第5層）の上面を検出した時点では、



第12図　第２−２調査区平面図・断面図（縮尺1/50）

未だ暗褐色土（第4層）との境界が不明確であったため、土手状盛土部分にサブトレンチ⑤を設定し、両層の層序を明確にすることとした。

その結果、第4層は厚さ0.1～0.15mで、第5層の上部に堆積することが明らかになった。第4層は、サブトレンチ⑧では第5層の墳頂中央部側にも堆積することを確認したが、サブトレンチ⑤においてはその位置に根による撹乱と富山市旧トレンチが入る。第5層は第4層よりしまりが強い。第5層の上面は若干の凹凸が見られるが、これは根による影響であり、本来は平坦面をなしている。第5層はw点からd′点方向へ1.1mの地点から墳頂部内側へ向けて傾斜しており、この傾斜が土手状盛土の斜面を形成している。

w－c 壁北東部の層序　第2層は表土下堆積土、第13～15層と第18～21層は盛土である。

w点の箇所においては、第2層の下に暗褐色土（第13層）が、そしてその下層には暗褐色弱粘質土（第14層）が厚さ0.08mで認められる。第14層上面の標高は56.880mで、第2－1調査区s－c′壁の第9層上面と標高がほぼ一致する。これらの土層は、墳頂中央部において最も上部で検出された盛土である。第14層の下には褐色粘質土（第15層）が厚さ約0.1mで認められる。第13～15層は他の盛土層とはやや様相を異にし、墳頂中央部に局所的に見られる土層と言える。そして、第15層の下において、w点からc点方向へ0.46mの範囲に黒褐色粘質土（第19層）が認められた。

第14層の南西側には暗褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土（第18層）が厚さ約0.1mで認められる。その下には、厚さ0.1～0.2mの暗褐色土（第20層）、さらに褐色土ブロックを含む極暗褐色粘質土（第21層）が認められる。今回の調査では掘削を標高56.587～56.627mの地点で止めているため、第19層と第20・21層との層位関係は明確でない。（高橋浩二）

サブトレンチ②　第2層は表土下堆積土、第3層は富山市旧トレンチ埋戻し土、第21～24層は盛土である。

第3層の下には、褐色土ブロックを含む極暗褐色粘質土（第21層）があり、その下に入り込むように褐色土ブロック・黄橙色土ブロック・小礫を含む黒褐色粘質土（第22層）と、さらに下に入り込むように暗褐色粘質土（第23層）が認められた。第23層の下には、褐色土ブロック・風化岩片を含む黒褐色粘質土（第24層）が認められた。

サブトレンチ②の底面においても、南西側に第24層が位置し、墳頂中央部へ向かって第23層、第22層、第21層の順に盛土されている状況を確認した。

サブトレンチ⑧　第2層は表土下堆積土、第4～8・24・25層は盛土である。

w－c壁においては、第2層の下に暗褐色土（第4層）が認められる。第4層は、風化岩片を含む褐色土（第5層）の上面では厚さが0.08m程であるが、ここから墳頂中央部側へ向かって0.3mと比較的分厚く、土手状盛土の内側に堆積することを確認した。

第5層は土手状盛土の上面を形成する土層である。サブトレンチ⑧の南東壁、南西壁、北西壁の調査によって、厚さが0.1mであることが明らかになった。第5層はc点からw点方向へ0.25～0.35mの地点から墳頂中央部側へ向けて傾斜していく。第5層と第7層の間には、サブトレンチ⑧の南東壁、南西壁においてのみ、風化岩片を含む褐色土（第6層）が厚さ約0.05mで見られる。風化岩片が含まれる度合いによって分けたが、第5層とは土質がよく類似しており、同一の層である可能性も考えられる。

黒褐色粘質土の第7層はサブトレンチ⑧の断面のうち、北西壁では薄いが、南東壁では厚さ0.12mで認められる。第7層はc点からw点方向へ0.55～0.6mの地点から墳頂中央部側へ向けて傾斜していく。第7層の下には風化岩片を含む褐色粘質土（第8層）が0.05～0.1mの厚さで認められる。また、その下には褐色土ブロック・風化岩片を含む黒褐色粘質土（第24層）が0.07mで認められる。サブトレンチ⑧の南西壁と北西壁を見ると、第7層、第8層、第24層が第25層の傾斜面に充填されることによって、上面が平坦に整えられていることが見て取れる。サブトレンチ⑧南東壁では、第7層、第8層、第24層はいずれも上面が平坦になるように積まれている。

第24層の下には風化岩片を含む褐色粘質土（第25層）が認められる。第25層は底面を確認していないため正確な厚さは不明だが、サブトレンチ⑧の西側が最も分厚く確認部分で0.3mを測る。サブトレンチ⑧の南西壁と北西壁を見ると、ここから南東壁側と墳頂中央部側へ向かって第25層の上面ラインが傾斜していくことが分かる。

このような断面観察の結果から、土手状盛土は第25層を芯に、その傾斜面に下から順に第24層、第8層、第7層、さらには第6層を継ぎ足して平坦にした後、最上部に第5層を積んで上面を平坦に整えたものと考えられる。第4層は土手状盛土の構築後、土手状盛土の上面から墳頂部側にかけて充填された盛土の可能性が考えられる。（佐藤巧庸・泉田侑希・髙橋浩二）

（8）墳頂部の土層

第2−2調査区における平面の状況　w−d′壁で確認された第17層は、富山市教育委員会の調査では標示石とされる礫1を中心に260cm×130cmの長楕円形の範囲に見られることから、土壙の可能性が推定されていた。

サブトレンチ③よりも南側を平面的に精査した結果、この第17層は富山市教育委員会の調査で指摘された範囲を越えて、w−e壁で認められた第24層へと帯状につながることが明らかになった。このため、第17層は土壙とは性質の異なる土層と判断し、盛土と認識して調査をすすめた。第17層と第24層は黒褐色のよく類似した土色であり、後者が褐色土ブロックや風化岩片を含む点で分別したが、両層の境界を平面的に把握することはできなかった。第24層の上面では、土手状盛土付近の標高56.550～56.650mの等高線が巡る箇所において、炭の小片を多数検出した。

第17層の東側には、土手状盛土から墳頂中央部側へ向かって第24、第23、第22、第21層が平面的に認められ、w−e壁の調査によってこの順に積み上げられたことが明らかになった。第17層の西側では第12層と第11層が平面的に認められた。これらの土層は、土手状盛土の内側に充填された盛土であると考えられる。

第19層はw点からd′点方向へ0.68m、またw点からc点方向へ0.46mの範囲において方形状に検出され、加えてこの箇所が墳頂中央部に位置することから、埋葬施設の可能性があるものと当初考えた。しかし、第2−1調査区に設定したサブトレンチ⑥や第1−2調査区では、第19層と対応する土層を確認することができず、土層の範囲が埋葬施設としては狭いものであると判断したため、その可能性は低く、今回の調査では盛土の一部と考えた。隣接する第17層や第21層との層位関係は、今回の調査では明らかになっていない。（髙橋浩二）

土手状盛土　第2－2調査区南西部では、墳頂外表付近の標高56.660～56.800mの地点で、風化岩片を含む褐色土（第5層）を検出した。第5層は、上層にある暗褐色土（第4層）よりも明るい土色を呈し、それとともに第1調査区で検出された土手状盛土を形成する土層である第5・6層と土質が類似していた。また、付近からは墳頂中央部へ向かって傾斜する第23層などの盛土層も確認できたため、第5層は土手状盛土を形成する土層であると判断した。

土手状盛土にサブトレンチ⑧を設定し、断ち割り調査を行ったところ、第25層を芯にして、第25層上面が墳頂中央部側や南東側へと傾斜する傾斜面に第24層、第8層、第7層、第6層を継ぎ足して平坦にした後、最上部に第5層を積んで上面を平坦に整えていることが明確になった。また、土色の観点からみると、風化岩片を含む褐色土又は褐色粘質土（第5・6・8・25層）の間に、黒褐色粘質土（第7・24層）を交互に挟んで積み上げていることが分かった。

土手状盛土は第2－2調査区の南東側から西側にかけて、平面的にやや弧を描くような形で続いている。調査区内での規模は、w－c壁側で上面の幅0.25～0.35m、d′－W壁側で上面の幅約1.1mである。土手状盛土上面の標高は56.660～56.800mである。w－c壁側では標高56.402～56.420mで掘削を止めているため、高さや第25層より下の土層は不明である。また、d′－W壁側では標高56.723～56.741mで掘削を止めているため、同じく高さや第5層より下の土層は不明である。

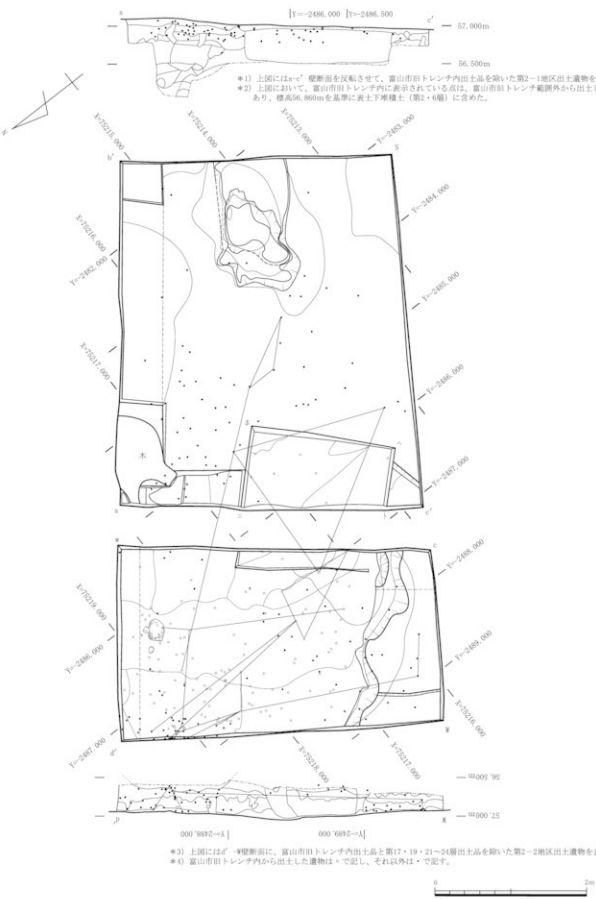
第2－1調査区では、山なりに積まれる褐色土又は褐色粘質土や、その間に黒褐色粘質土を交互に挟んで積むような様相の盛土が認められず、土手状盛土と考えられる土層を検出することはできなかった。そのため、第2－1調査区にかけての土手状盛土のつながりは判明しなかった。

(9) 遺物の出土状況

第2調査区からは、233点の遺物が出土した。内訳は、土器片229点、磁器片1点、鉄製品3点である。このうち、富山市旧トレンチ内からは土器片88点、磁器片1点、鉄製品1点が出土した。土器片については、弥生土器または土師器と考えられる。分布状況を第2調査区遺物分布図（第13図）に示した。東側が第2－1調査区、西側が第2－2調査区で、s－c′壁断面（反転）とd′－W壁断面にそれぞれ遺物の垂直分布を表した。

第2－1調査区では、土器片69点、鉄製品2点の合計71点が出土した。このうち、富山市旧トレンチ内から出土したのは、土器片7点と鉄製品1点である。この鉄製品は、上部が輪状、下部が棒状、断面が円形をなす金具である。分布状況については、墳頂内側（第2－1調査区内北西側）に出土地点が集中している。出土層位ごとに示すと、次のようになる。表土の第1層からは土器片13点が出土した。このうち、赤彩された台付壺の破片1点（第16図13）を図化した。表土下堆積土の第2層からは土器片34点、棒状鉄製品1点が出土した。同じく第6層からは土器片14点が出土した。盛土の第15層からは土器片1点が出土した。

第2－2調査区では、土器片160点、磁器片1点、鉄製品1点の合計162点が出土した。このうち富山市旧トレンチ内から出土したのは、土器片81点、磁器片1点、鉄製品1点である。この鉄製品は丸釘である。分布状況については、土手状盛土内側の広い範囲において遺物を検出しているが（富山市旧トレンチ内出土のものを除く）、墳頂中央部のw点付近からの出土はわずかである。また、離れた地点間において接合する土器片が多く見受けられた。出土層位ごとに



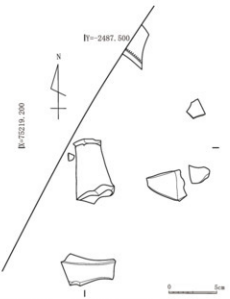
＊1）上図にはα-α′壁断面を反転させて、富山市旧トレンチ内出土品を除いた第2～1地区出土遺物を表示した。
＊2）上図において、富山市旧トレンチ内に表示されている点は、富山市旧トレンチ範囲外から出土したものであり、標高56.860mを基準に表土下堆積土（第2・6層）に含めた。

＊3）上図にはβ-β′壁断面に、富山市旧トレンチ内出土品と第17・19・21～24層出土品を除いた第2～2地区出土遺物を表示した。
＊4）富山市旧トレンチ内から出土した遺物は＊で記し、それ以外は・で記す。

第13図　第２調査区遺物分布図（縮尺1/50）

示すと、次のようになる。表土の第1層からは土器片10点が出土した。表土下堆積土の第2層からは土器片24点が出土した。盛土の第4層からは土器片2点、同じく第7層からは土器片2点、同じく第9層からは土器片3点が出土した。

同じく盛土の第10層からは土器片17点が出土した。このうち、d′－W壁際のX＝75219.200、Y＝－2487.500、標高56.682m地点において出土した土器片3点が接合した。この3点は高杯脚部であり、出土状況を第14図、実測図を第16図14に示した。これと接合する土器片は他にもあり、南西方向へ約3.3～3.4m離れた地点の第1層と第4層から各1点、富山市旧トレンチ内から2点出土している。



第14図　土器出土状況（縮尺1/4）

また、この土器に隣接して（d′点からW点方向へ0.76m、標高56.700mの地点）、高杯口縁部の破片が4点出土し、接合した（第16図11）。これと接合する土器片は他にもあり、北方向へ約0.1m離れた地点の第1層から1点、富山市旧トレンチ内から3点出土している。この土器と同一個体と考えられるものは、他にもd′点からW点方向へ0.484～2.664mの範囲において、第1層から1点、第10層から1点、第12層から1点、富山市旧トレンチ内から1点出土しているが、接合はできなかった。上記の高杯脚部と口縁部は、法量、焼成、胎土が類似することから、同一個体の可能性が考えられる。なお、第16図11と口縁部の法量や施文が類似する高杯が、他に富山市旧トレンチ内から1点出土している（第16図12）。

第15図　土器出土状況（縮尺1/4）

盛土の第11層からは土器片3点、第12層からは土器片3点が出土した。

同じく盛土の第17層からは土器片8点が出土した。このうち、礫1の北東側に近接する、X＝75218.400、Y＝－2486.200、標高56.770m地点から、口縁部を上にし、北西側に傾いた状態で、台付壺の口縁部から頸部にかけての破片が出土した（第15図、第16図10）。これと接合する土器片は他に見つかっていない。胴部以下を欠くが、口縁部はほぼ完存している。

これらのほか、盛土の第19層からは土器片1点、第21層からは土器片5点、第23層からは土器片1点が出土した。土手状盛土を構成する土層の第5～8層、第24・25層からは、遺物は出土しなかった。

上記のように、第2－2調査区の第10層においては、ほぼ同じ地点から、同一個体の可能性が考えられる高杯の脚部と口縁部が出土した。これらと接合する土器片は、離れた地点からも見つかっており、意図的な行為が感じられる。また、第17層においては、口縁部がほぼ完存する台付壺と考えられる土器と、これに接して礫1を検出している。台付壺は、弥生時代終末期の北陸北東部において特徴的にみられる祭祀土器である。加えて、礫1は意図的に運び込まれたと考えられる大きさであった。このことから、第17層は祭祀が行われた土層であると推定した。また、第10層についても同様な性格の土層であると推定しておきたい。

なお、両層から出土した高杯脚部及び口縁部、また台付壺の底面の標高は、56.610～56.710mであった。この値は、第1－2調査区の明黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土（第11・15層）上面の標高ともほぼ同じであり（56.620～56.740m）、祭祀が行われたと推定される第2－2調査区第10・17層と第1－2調査区第11・15層とは対応する土層と考えられる。

（佐藤巧庸・泉田侑希・髙橋浩二）

注

(1) 富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』

(2) 富山大学人文学部考古学研究室 2016『杉谷4号墳－第4次発掘調査報告書－』

第4章　出土遺物

今回の調査では、第1調査区内外と第2調査区から土器片など合計295点の遺物が出土した。このうち図化することができた20点を取り上げて説明する。4・8は第1調査区内、9は第1調査区外、1～3、5～7、10～20は第2調査区から出土したものである。

1は、弥生土器の壺の有段口縁部で、第2－2調査区の富山市旧トレンチ内から出土したものである。口縁端部は幅2.5㎜の面をなす。外面には横方向のハケメ状の条線が認められ、内面にはナデ調整が施されている。口縁端部から外面にかけて赤彩が施されている。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

2は、弥生土器の高杯または壺の口縁部で、第2－2調査区の第10層から出土したものである。内外面には横方向のナデ調整が施されている。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

3は、弥生土器の口縁部で、第2－1調査区の第1層から出土したものである。口縁部は外傾し、直線的に立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。外面には横方向のナデ調整が施されている。色調は外面が明黄褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

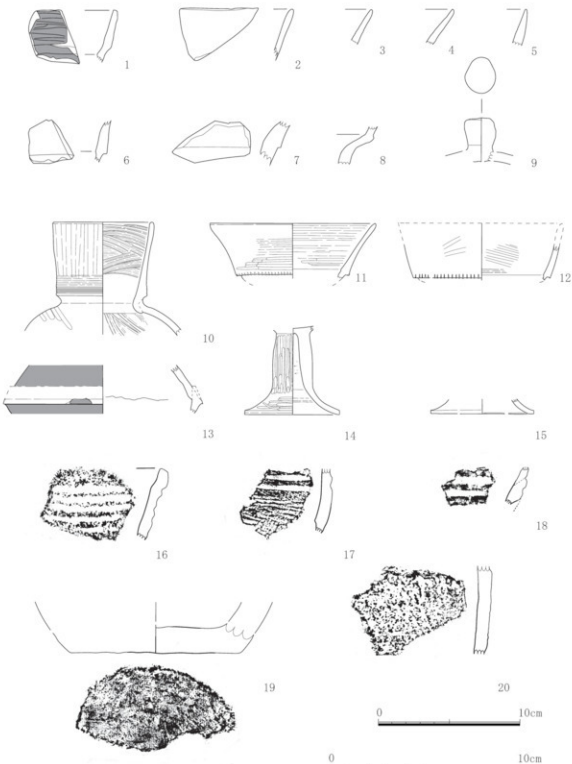
4は、弥生土器の口縁部で、第1－2調査区第1層、第2－2調査区の富山市旧トレンチ内から出土した土器片2点が接合したものである。口縁部は外傾して立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。内外面に横方向のミガキ調整が施されている。色調は外面が明黄褐色、内面が主に褐灰色で一部明黄褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

5は、弥生土器の口縁部で、第2－1調査区の第9層から出土したものである。口縁部は直立気味に外傾して立ち上がる。口縁端部は薄く、丸みを帯びる。内外面ともに横方向のナデ調整が施されている。色調は内外面とも主に橙色で、一部にぶい黄橙色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

6は、弥生土器の壺または高杯の口縁部下端で、第2－2調査区の第4層から出土したものである。口縁部下端の内外面に段を有し、横方向のナデ調整が施されている。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。内面には黒色の付着物が認められる。胎土は緻密である。焼成は良好である。

7は、弥生土器の壺または高杯の口縁部下端で、第2－2調査区の富山市旧トレンチ内から出土したものである。口縁部下端の内外面に段を有する。外面には横方向のミガキ調整が施されている。内面は風化が著しいため、調整痕は観察できない。色調は外面が明赤褐色、内面は褐灰色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

8は、弥生土器の壺または甕の有段口縁部で、第1－2調査区の第7層から出土したものである。頸部から口縁部へは外反して段部で屈曲し、口縁部は直立気味に外傾して立ち上がる。口縁端部は欠損している。段部は若干突出する。内外面ともに横方向のナデ調整が施されている。色調は外面が浅黄橙色、内面が主ににぶい黄橙色で一部褐灰色を呈する。外面の一部には焼成の際に生じたと推測される黒斑がある。胎土は直径1㎜以下の砂粒をわずかに含む程度で、緻



第16図　出土遺物（10～15は縮尺1/3、他は縮尺1/2）

密である。焼成は良好である。

9は、弥生土器の蓋のつまみ部で、第1調査区外の表土において採集したものである。外形は中央よりやや下部がくびれた円柱状で、わずかに外傾して直立気味に立ち上がる。頂部は平坦で、平面が楕円形を呈する。高さ2.3cm、頂部長径1.5cmを測る。表面が全体的に風化しているため、調整痕は不明瞭である。色調は主に浅黄橙色で一部橙色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

10は、弥生土器の台付壺と考えられる口縁部から肩部で、第2−2調査区の第17層から礫1に近接して出土したものである。弥生時代後期から終末期の北陸北東部において特徴的にみられる祭祀土器である。口縁端部が一部欠けるものの、口縁部はほぼ完存しており、口縁部径8.2cm、高さ5.8cmを測る。口縁部はやや外側に開きながら直線的に立ち上がる。口縁部外面は縦方向のミガキ調整後、有段口縁部の下端に3条の擬凹線文を巡らす。口縁部内面には断続的な横方向のハケメ調整が施されている。肩部外面には横方向のナデ調整と部分的なミガキ調整、内面にはナデ調整が施されている。頸部内面には胴部との接合に際して生じた粘土の被りが見られる。色調は内外面ともに明黄褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

11は、弥生土器の高杯の口縁部で、第2−2調査区の第1層と第10層出土の土器片2点、富山市旧トレンチ内出土の土器片3点が接合したものである。口縁部復元径13.2cm、高さ4.2cmを測る。口縁部は外反して開く。口縁部下端には内外面ともに段がつく。また、段部外面下端には、ヘラ状工具を用いて12よりも深く、約2㎜間隔で細かく刻目が施されている。杯部は丸みをもつものと考えられる。内外面ともに横方向のナデ調整の後、ミガキ調整が施されている。色調は内外面ともに橙色を呈するが、一部に焼成時に生じたと考えられる黒色部が認められる。胎土は緻密である。焼成は良好である。

12は、弥生土器の高杯の口縁部で、第2−2調査区の富山市旧トレンチ内から出土した土器片3点が接合したものである。口縁部は直立気味に外反する。口縁部下端には内外面ともに段がつく。また、段部外面下端には、同じくヘラ状工具を用いて約2㎜間隔で施文されているが、刻目は11と比べて浅いものである。内面には右斜め方向のハケメ調整の後に、ナデ調整が施されている。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。胎土は緻密である。焼成はやや不良である。

13は、弥生土器の台付壺と考えられる胴部で、第2−1調査区の第1層から出土したものである。算盤玉形を呈しており、胴部最大径の位置に突帯を貼り付けていた痕跡が残る。突帯痕の幅は2.2cmである。外面には赤彩が施されているが、突帯が剥れ落ちた部分には認められないことから、突帯貼付後に赤彩されたものと判断できる。突帯痕の部分には、斜め方向のハケメが認められる。胴部最大径位置の内面には粘土紐の継ぎ目が残っており、内傾接合したことがうかがえる。内外面ともに明黄褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成はやや不良である。

14は、弥生土器の高杯脚部で、第2−2調査区の第1・9・10層出土の土器片5点、富山市旧トレンチ内出土の土器片2点が接合したものである。脚部の高さは6.9cm、裾部径は7.8cmである。脚部は、柱状部の中位がわずかに膨らみ、裾部にかけてハの字状に緩やかに開く。裾端部には幅3㎜の面取りが施されており、その際に砂粒が移動した痕跡が浅い線となって部分的に見られる。外面は、脚柱部に縦方向の丁寧なミガキ調整、裾部に横方向の丁寧なミガキ調整

が施されている。内面は、脚柱部に細いヘラ状工具によるケズリ調整、裾部に横方向のナデ調整が施されている。また、杯底部内面にはミガキ調整が施されている。色調は外面が黒色、内面が明黄褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

15は、弥生土器の高杯または器台の裾端部で、第2−2調査区の富山市旧トレンチ内から出土したものである。裾端部には幅3㎜の面取りが施されている。外面には横方向のミガキ調整、内面には横方向のナデ調整が施されている。色調は外面の一部が明黄褐色で、内外面ともに褐灰色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

16は、縄文土器の口縁部と考えられるもので、第2−2調査区の第10層から出土した。外面には凹線文が5条認められる。色調は内外面ともに褐色を呈する。胎土は粗く、直径2㎜程度の砂粒を多量に含む。焼成は不良である。

17は、縄文土器と考えられる胴部で、第2−2調査区の第10層から出土したものである。外面には凹線文が2条認められ、その下位には横方向の条痕調整が施されている。色調は内外面ともに褐色を呈する。胎土は粗く、直径1㎜程度の砂粒を多量に含む。焼成は不良である。

18は、縄文土器と考えられるもので、第2−2調査区の第17層から出土した。外面には凹線文が2条認められる。土器片の下端は粘土紐の継ぎ目で剥離しており、断面観察から内傾接合で成形されたことがわかる。色調は内外面ともに明褐色を呈する。胎土は粗く、直径1㎜程度の砂粒を多量に含む。焼成はやや不良である。

19は、平底の底部で、第2−2調査区の第17層から出土したものである。底部復元径は9cmである。底部最下部は外傾して立ち上がる。色調は外面が橙色、内面が暗褐色を呈する。胎土は粗く、直径1㎜程度の砂粒を多量に含む。焼成はやや不良である。16・17と胎土や焼成の特徴が類似している。

20は、弥生土器の壺または甕の胴部で、第1−1調査区の第2層から出土したものである。外面は風化しているが、斜め方向のハケメ調整が部分的に認められる。内面には横方向のケズリ調整が施されている。色調は外面が主に黄橙色で一部にぶい黄褐色、内面が橙色を呈する。胎土はやや粗く、直径1㎜以下の砂粒を多量に含む。焼成は良好である。

（蒲生侑佳・佐藤巧庸・清水秀直・泉田侑希・二口頌之・髙橋浩二）

第5章　考　察

1．墳頂部の築成法について

第3章第2節(4)において報告した墳頂部の築成状況について、ここであらためて整理しておく。第4次調査では墳頂部平坦面にかかる第1調査区西端において、標高56.4m付近の墳丘外表側で、基盤土第Ⅰ層起源と考えられる純度の高い黄褐色粘質土による山なりの土層（第20層）と、その内側に墳丘中心方向に傾斜をもつ互層状の土層群（第14～19層）を確認した。また、最も平坦面の中心に近い位置で、これらとは傾斜角度の異なる第13層を検出した。そして、第20層を墳丘構築時の土手状盛土[1]、第13層を墓壙に関係する土層である可能性を考えた[2]。

今回の調査では、この第20層とは上面の標高を異にし平面的に不連続であるが、墳頂部北西面をコ字形に囲む黄褐色土層（第1・2調査区第5・6層）を検出し、墳頂部は土手状盛土を周囲に繞らせて構築していたことが明らかになった。また、第1調査区内では、第4次調査第13層と近似する土層が、土手盛土の内側を廻るように存在することも確認された（第9図）。

次に、土手状盛土に囲まれた調査区中央部の土層堆積状況（第1-1調査区e－b壁）をみると、南東辺中央部から畦の交点に向けて黒褐色粘質土（第17・19層）の上面が傾斜する。この傾斜面の上部を黄褐色粘質土層（第13層）が厚く覆うが、この土層は第2－1調査区の方向に広がり（第9層）、堆積状況からはこの範囲が最終的に埋め立てられたことを示唆している。

以上のように墳頂部は、① 土手状盛土を構築した後、その内部に盛土を充填して築成される、② 土手状盛土は上面の高さからみると全周が等しいのではなく一方の切れたコ字状を呈する、③ その内部に特徴的な硬質の土層がめぐる、④ 埋葬施設に関わる可能性のある黒色粘質土層の傾斜が土手状盛土の途切れる東南辺から畔交点の方向に向かう、等の点が確認された。

2．　標示石について

富山市教育委員会の1974年の調査では、墳頂部トレンチにおいてやや黒ずんだ260㎝×130㎝の長楕円形の範囲が認められ、その範囲内に25㎝大の標示石（？）と思われる礫があり、さらにその礫を中心に高坏などの土器の出土がみられたと報告された[3]。そして、この範囲は便宜的なものだが、土色の違いおよび「土器の出土、標示石の存在から土壙ともみられる」とされた。報告書では遺構図にこの範囲の記載はみられないが、トレンチ床面に線を引いて範囲を示した写真が掲載されている。

今回の調査では、この標示石を再発掘により確認したが、上述の所見のような色調の異なる土の範囲は認識できていない。一方で、墳頂部の土層中に含まれるこのような円礫としては大きさの点で唯一かつ特異なものであり、以下のような埋葬施設にともなう礫である可能性は依然として考慮されてよいものと考えられる。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、墳墓の埋葬施設上部にさまざまなかたちで礫を置く事例は、坂本豊治によれば約70例があり、その7割近くが弥生時代後期後葉から終末期に集中し、出雲と吉備を中心に分布すること、認められる墳墓の形態も多様で、形状も自然の円礫に加え、石杵や石斧の転用品といった加工品もあり、大きさもさまざまであることなどが知ら

れている[4]。また、古墳時代前期になると山陰地方ではこうした儀礼が継続するものの、吉備では廃れてしまうという地域的な違いも指摘されている。

瀬戸内海沿岸地域から山陰地域の事例を検討した大谷晃二は、こうした埋葬施設上の礫のありかたをA～Dの4類に類型化している[5]。A類は、主体部上に礫を積み上げるもので岡山県楯築墳丘墓など、B類は礫をかき集めるもので香川県奥10号墳丘墓など、C類は1個ないし2個の礫（石器）を置くもので島根県安養寺1号墳丘墓など、D類は盛り上げた墓壙上面に礫を貼るもので鳥取県阿弥大寺土壙墓などがこれにあたるとした。

杉谷4号墳の事例はC類に相当し、礫周辺の土器の出土状況も典型例とされた安養寺1号墓第1主体・第2主体上面[6]によく似たありかたを示す。また、北陸地方における四隅突出型墳丘墓の例である福井県小羽山30号墓も、大谷はC類に位置づけている。同墓では、多量の破砕土器とともに磨製蛤刃石斧を転用した杵形石器が1点出土している[7]。同じC類のなかでも礫のありかたに杉谷4号墳との相違がみられ、細分の可能性を示唆している。

これらの事例をみると、いずれも木棺の直上に礫が位置することは注意してよい。したがって、二次的な移動がなければ、棺の方位は別にして、こうした礫（標示石）の下位に埋葬施設の存在を想定することは無理ではない。こうした観点から、① 土手状盛土内側の構築状況と墓壙、埋葬施設のありかたの解明、② 標示石の平面位置を重視したうえでの埋葬施設の追究（黒褐色粘質土上面の傾斜方向にあたる畔交点付近と標示石との位置関係）を引き続き次年度の課題としたい[8]。

（次山　淳）

注

(1)青木　敬 2003「墳丘構築法の再検討」『古墳築造の研究－墳丘からみた古墳の地域性－』六一書房

(2)次山　淳 2016「墳丘の築成法について」『杉谷4号墳－第4次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室

(3)富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』

(4)坂本豊治 2016『出雲王登場　とことん解剖西谷3号墓』出雲弥生の森博物館

(5)大谷晃二 1995「弥生墳丘墓における主体部上の祭祀の一形態」『岡山市矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団

(6)出雲考古学研究会 1985『荒島墳墓群』古代の出雲を考える4

(7)小羽山墳墓群研究会 2010『小羽山墳墓群の研究　越地方における弥生時代墳丘墓の研究－資料編－』福井市立郷土歴史博物館研究報告、福井市立郷土歴史博物館

(8)なお、島根県西谷3号墓の事例について検討した渡邊貞幸は、第1主体および第4主体（主椁・副椁）埋葬施設上の円礫が、3例ともに朱彩され、集積された土器群の下から発見されたことなどの理由から、こうした円礫を「墓標」「標石」と評価することはできず、石杵としての機能も強調できないとしたうえで、石の基本的な性格を首長霊が憑依していると観念された依代であったと理解し、神霊の宿るものを意味する「主」という言葉を使って、これらの円礫を「石主」と名付け、祭儀に当たって首長霊のシンボルとして扱われ、各種の所作儀礼などにも使われたのではないか、と推定している（渡邊貞幸 2015「総括」『西谷3号墓発掘調査報告書　本文編』島根大学考古学研究室調査報告第14冊・出雲弥生の森博物館研究紀要第5集、島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館）。

第6章　まとめ

第5次調査では、調査計画にしたがい、1974年の富山市教育委員会による調査の墳頂部トレンチの位置の確認、および墓壙等の埋葬施設の確認を主たる目的として、墳頂部平坦面の調査を実施した。

第1調査区は、調査区全体の東部（第1－1調査区）・北部（第1－2調査区）にあたる。調査の結果、以下のような成果が得られた。

1．富山市教育委員会の旧トレンチの位置を、平面および断面で確認した。

2．墳頂部を構築するにあたり、周囲に地山起源の黄褐色粘質土による土手状盛土を築成したのち、この盛土の内側に黒色土、黄褐色土混じりの土を順次中央部に向かって積み込み墳丘を構築すること、平面的には土手状盛土は墳頂部の周囲を全周するのではなく、北東辺の途中で途切れ、北西辺・南西辺にかけてコ字状となることが判明した。

3．第4次調査で墓壙に関係するのではないかと推定した同調査第1調査区第13層が、土手状盛土の内側にめぐる可能性が高いことが判明した。

4．黒色粘質土の上面からみると、調査区中央、畔の交点付近に向かう傾斜が認められる。

5．出土遺物は、土器片（弥生土器または土師器）60点、陶器片1点、磁器片1点の計62点が出土した。（次山　淳）

第2調査区は、調査区全体の南部（第2－1調査区）・西部（第2－2調査区）にあたる。調査の結果、以下のような成果が得られた。

1．第2調査区でも同様に富山市教育委員会の旧トレンチの位置を、平面・断面で確認した。

2．富山市教育委員会の調査で見つかった25㎝大の標示石(?)とも思われる礫を再検出した。また、標示石(?)を中心にして260㎝×130㎝の長楕円形の範囲に、他に比べてやや黒ずんだ土が堆積し、これが土壙ともみれると推定されていたが、今回の調査ではこれにあたる土層（第2－2調査区第17層）が長楕円形の範囲を越えてしまうことから、土壙の可能性は低く、盛土層の一つと判断した。

3．第2－2調査区において土手状盛土を断ち割り、風化岩片を含む褐色土又は褐色粘質土と黒褐色粘質土とを交互に積み上げて構築していることが判明した。また、土手状盛土の内側には、墳頂中央部へ向かって順次盛土を充填していることを、一部であるが確認した。

4．第2－1調査区サブトレンチ⑥断面においては、調査区中央、畔の交点付近に向かう土層の傾斜が認められる（第13～22層）。

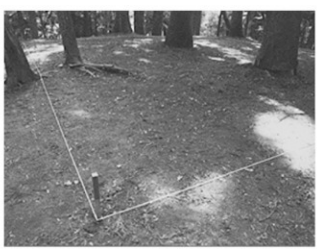
5．標示石(?)に近接して台付壺と考えられる土器、また隣接する箇所から高杯が出土した。これらは墳頂部における祭祀に伴う可能性が高いものである。これらを含めて第2調査区からは、土器片229点（うち富山市教育委員会旧トレンチ内出土88点）のほか、磁器片と鉄製金具片が各1点出土した（いずれも富山市教育委員会旧トレンチ内出土）。

杉谷4号墳は、北陸における四隅突出型墳丘墓をはじめとする弥生時代の墳墓、また杉谷古墳群の出現や変遷を考える上で重要であり、今後ともさらなる調査をすすめるとともに、学術的な意義を明らかにしていきたい。（高橋浩二）

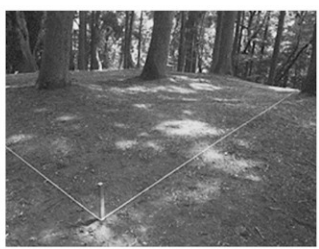
図　　版

1　第４次調査第１調査区との位置関係
（E点・第１−１調査区側、東から）

2　第４次調査第２調査区との位置関係
（N点・第１−２調査区側、南南東から）

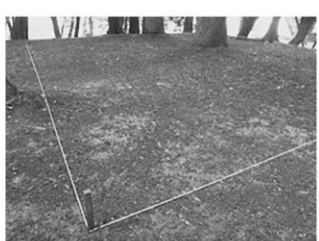


3　調査区設定状況（E点・第１−１調査区側、東北東から）



4　同左（N点・第１−２調査区側、北から）

5　調査区設定状況（S点・第２−１調査区側、南から）



6　同左（W点・第２−２調査区側、西南西から）

7　調査区完掘状況（E点・第1−1調査区側、東から）

8　同上（N点・第1−2調査区側、北から）

9　第 1－1 調査区サブトレンチ③盛土状況・富山市旧トレンチ確認状況（南東から）

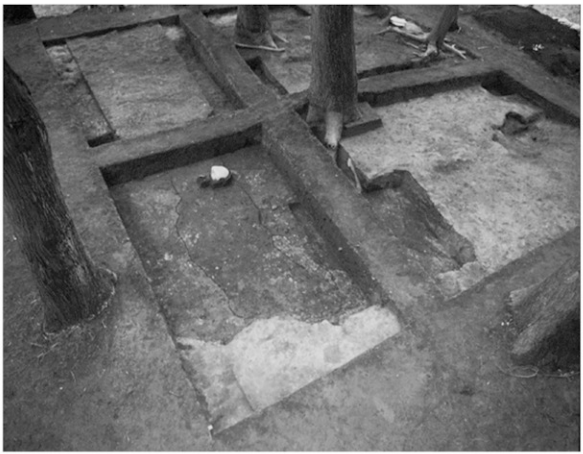
10　第 1－1 調査区サブトレンチ①盛土状況（左側は第 4 次調査第 1 調査区、東から）

11　第 1－1 調査区サブトレンチ⑤土手状盛土検出状況（東から）

12　第 1－2 調査区サブトレンチ②盛土状況（北から）

13　第 1－2 調査区 K－d 壁側盛土状況（北西から）

14　第 1－2 調査区ゴミ穴検出状況（北から）



15　調査区完掘状況（W点・第2−2調査区側、西から）

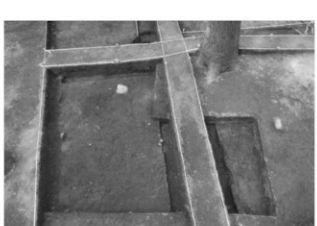
16　同上（W点・第2−2調査区側、西から）

17　第２－１調査区完掘状況（S 点側、南から）

18　第２－１調査区落ち込み検出状況（西から）

19　第２－１調査区富山市旧トレンチ確認状況
（ﾙｰﾍ壁側、北西から）

20　第２－１調査区s－c′壁側盛土状況（南から）



21　第２調査区富山市旧トレンチ確認状況（南西から）

22　第２－２調査区富山市旧トレンチ底面確認状況（西から）

23　第 2－2 調査区礫 1～3 検出状況（南西から）

24　第 2－2 調査区礫 1 及び台付壺検出状況（北東から）

25　第 2－2 調査区 d′－W 壁側盛土状況（南東から）

26　第 2－2 調査区第10層土器検出状況
（d′－W 壁、東北東から）

27　第 2－2 調査区西側盛土状況（北東から）

28　第 2－2 調査区土手状盛土断ち割り状況（北から）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

11

12

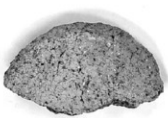
13

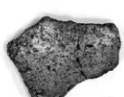
15

16

17

18


19


20

10

14

ふりがな	すぎたに 4 ごうふん －だい 5 じ はっくつちょうさ ほうこくしょ－
書名	杉谷４号墳 －第５次発掘調査報告書－
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高橋浩二(編)、次山 淳、蒲生侑佳、佐藤巧庸、清水秀直、泉田侑希、二口頌之
編集機関	富山大学人文学部考古学研究室
所在地	〒930-8555　富山県富山市五福3190　TEL 076 (445) 6195
発行年月日	2017年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
すぎたに４ごうふん 杉谷４号墳	富山県富山市杉谷2630	36度 40分 40秒	137度 8分 19秒	20160801 ～20160831	約71㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杉谷４号墳	墳墓・古墳	弥生～古墳	四隅突出型墳丘墓	弥生土器・土師器、陶器、磁器	富山市教育委員会が1974年に調査した墳頂部トレンチの位置の確認、および墓壙等の埋葬施設の確認を主たる目的に墳頂部の調査を実施した。 その結果、富山市教育委員会の旧トレンチの位置を確認し、それとともに25㎝大の標示石(?)とも思われる礫を再検出した。 また、墳頂部を構築するにあたり、周囲に土手状盛土を築成したのち、この内側に中央部に向かって盛土を積み込むこと、平面的には土手状盛土は墳頂部の周囲を全周するのではなく、北東辺の途中で途切れ、北西辺・南西辺にかけてコ字状となることが判明した。加えて、調査区中央、畔の交点付近に向かう土層の傾斜を確認した。標示石(?)の周辺から、墳頂部の祭祀に伴う可能性が高い台付壺と考えられる土器や高杯を検出した。

2017年12月28日印刷
2017年12月28日発行

杉谷４号墳
－第５次発掘調査報告書－

編集・発行　富山大学人文学部考古学研究室
〒930-8555　富山県富山市五福3190
TEL 076-445-6195
印　刷　株式会社 チューエツ